

A photograph of two young children walking on a sandy beach at sunset. The child on the left is a girl in a white sleeveless dress with a ruffled hem and a small bow in her hair. The child on the right is a boy in a white short-sleeved button-down shirt and white shorts. They are both barefoot and holding hands. Long shadows are cast on the sand, and the water's edge is visible in the foreground. The overall mood is peaceful and nostalgic.

かたぐるま

katasan1019

初めまして、俺の名前は「伊助」と言います。百姓をしています。

たぶん二十四才です。親や兄弟はいません。独り者です。

これから俺のちょっと変わった話をします。

ある日の事でした。畑仕事が終わったんで

「晩のおかずに山菜でも採って来るか」と思って俺は山に山菜がたくさんある所に入って行ったんだ。鼻歌を歌いながらね。すると、俺のとは違う別の音がどこからか聞こえて来たんだ。

「あれえ、誰か先にいるのかなあ。でも、ここ俺しか知らないはずだし……」

と思いながらその音の方へ入って行ったんだ。それで、だんだん近づいたみたいなんだけど、それは今まで聞いた事もない感じで、低くて、太い音で、でも時々でっかい音でさあ。よく聞くと

人の声だったんだ。でっかい鼻歌でさ。なにを歌っているのかわかんないけど本当にヘタクソなんだよね。俺は鼻歌の核心に近づいて来たんで、身を屈めて草の中に入って行ったんだ。そして、低く頭を下げてほふく前進でさ。でも、あんまりヘタなんで笑いをこらえるのが大変で、その度に前進を止めて、口を押さえたさ。そしたら目の前、近くになんと、でっかい背中があつて、浅黒くてつるつるの坊主頭でさ、後ろから見てもこめから、こめかみまで短いヒゲがはえてて、太くて長い足を「八」の字にどーんと広げて、手に持った草を振りながら「ふんふん」鼻歌を歌ってるんだ。

そうさな、身の丈なら七尺はあつたかな、俺は

「なんだ！夢か！こんなでっかい人間いるわけないし！」と思ったね。

だけど畳が歌う訳ないから一体どうなってるんだろう。と思ってさ、両肘を地面につけて腹ばいになって見つからないように息を詰めて、じっとしていたんだよ。でも、肘が疲れて、しびれてきたから体勢を変えようと少し動いたら、辺りの草がカサカサ少し鳴ったんだ。そしたら、運の悪いことに、その大男が気づいたのか

「ウン？」って俺の方に振り向いたんだ。その目の大きいこと。鼻も顔の真ん中にどかんとでっかくて、口も大きいんだよね。もうびっくり、見つかったら食べられると思ったよ。

俺はすっかり、体が固まって逃げようにも体はしびれてるし

(ああ、これで一貫の終わりだ……) と思ったね。でも、やっとの思いで立ち上がったんだ。

そしたら、向こうもそこに誰かが居たんで

ちよっとびっくりしたみたいで、目をむいてこっちを見てて、俺は

「今だ！」と思って向こうに負けじと両手をこれ以上は広げられない位に大きく広げて

「わーっ」って叫んでさ、そのままぐるっと振り向いて走って、大男を威嚇したんだ。

俺は走りに走ったよ。それで、足はもつれ、口は渴き、山の下りってさ、上りよりきついなんだよね。おしりがじんじんして膝も痛くなってきて。

でも、なんだか後ろが静かなんで、恐る恐る速度を遅くしつつ振り向いてみたのさ、そしたら、全然大男はいないんだ。俺は

「なーんだ。いないじゃないか。追いかけて来なかったんだな。めでたしめでたし」

なんて言いながら前を向くと目の前に大男の胸があつて

「ミツカッタ」

って言うんだ。俺は「ぎゃー」って叫んで、又来た道を走って上って行ったんだけど、足はもう限界だし、痛いし息は上るしで、走れっこなかったんだよね。

大男は「ムフムフ」って鼻息をさせながらすぐそこにまで、大股で追いかけて来て、（あとすこしで、大男が長い腕を伸ばせば、俺の首根っこがつかまれちゃう）って思った途端、俺は脚を滑らせて沢へと転げ落ちたんだよね。で、どれ位たったのか気がついたら辺りは真っ暗で何も見えなくて、頭にはコブとかが出来ていて痛いし、どれ位そこにいたのかわかんないんだけど、追っかけて来てた大男からは逃げられたみたいなんで、川づたいに家へと戻ったんだ。

家に戻ってから、コブの手当てをして、夕飯を食べて、今日一日の事を思い出していたんだよね。

「おかしな一日だったなあ。あの大男は一体どこから来たんだろう」

ってさ。そのうち眠くなって寝ちまったんだ。

ここからは、ワタクシが伊助さんと共に話を進めていく事に致します。ワタクシは大男と共に生きている所の者で、実体はない光りでございます。伊助さんの一部始終を見てまいりましたので続けてお話させていただきます。

伊助の家の外では、暗黒の闇の中に、白いフクロウだけが目をむいて枝に止まっていました。その木の下には例の大男がいて、そのフクロウをじっと見ていました。

フクロウの首がぐるっと一回転し、四方を見渡し「ホーツ」と一鳴きした時、闇に隠れていたねずみ色した雲がさっと割れ、月の光りが差し込んで来ました。

そして、その光りに驚きフクロウが止まり木をギュッと握りしめた時、大男がニヤッと笑い両手を大きく一杯に広げ、深呼吸をするように胸のところで交差させ、体を丸くすると、ねずみ色の大きなフクロウに変身しました。

そのフクロウが大きな目をグリグリと回し、首をかしげて、トコトコと歩き足元を横切った野鼠には見向きもせず、その山で一番高い木まで飛び上がり、太い枝をがしっと掴んだのでした。

枝の上を右に左に歩いていたフクロウは、何かを探るかのように枝の上から遠くを見ていました。

しばらくそうしていたフクロウは、目的の物を見つけたかの、毛の中に空気を入れ、体を膨らませ、一気に空気を抜くように、ぶるっと体を震わせました。

そして、飛び立つ準備をするように大きな羽を広げ、ほんの少し足を縮め、勢いをつけて飛び立ちました。

大きくゆっくりと静かに羽を動かし、一直線に目標に向かって、迷うことなく進みました。

フクロウが飛び立つと、差し込んでいた月の光りは、又、ねずみ色の雲に塞がれて見えなくなり、辺りは又、闇となりました。

フクロウが飛び立つのを身を潜めていた野ねずみは「難を逃れた」とばかりにどこかに消えて行きました。

伊助は、日中の疲れからか熟睡していました。と、その時、表の戸を「コンコン」と叩く音がしました。伊助は跳ね起きました。

「何！」いやー。俺は驚いたよ。戸を叩く音が聞こえた瞬間（大男だ！）ってわかったんだ。

「アイツ家を突き止めやがった」ってね。

俺は、体はぶるぶる震え足はがくがくして布団の中で丸まっていたんだよ。

でも、戸を叩く音は、大男にしては小さくてかわいい音だったんだよね。まるで、キツツキでも

来たんじゃないかって感じでさあ。

そのうち、又その音が聞こえてきて「コンコン」ってさ。大男だったら戸にでっかい影が映るだろうけど、よく見るとそれも見えないんだよね。時間がたつと落ちついて来て心臓が鳴るのも収まって来たんで、布団から頭を少し出してみたんだよ。

「戸を叩く音以外は、嘘みたいに当りは静かで、俺は（風か……）って思い始めたんだ。

まあ、怖かったからそう思ったかっただけなのかも知れないんだけどね。すると、そのうちその音もしなくなつたんだ。

俺は本当に恐る恐る布団から出て、近くにあった天秤棒を握り締めて戸口まで行ったんだ。へっぴり腰でね。今考えても笑っちゃうな。

そして、そーっと戸を開けてみたのさ。俺の家なんて安普請だから、開け閉めはギシギシガタガタというのが常なんだけど、その時は、まるで蠟でも塗ったんじゃないかって位にするすると音もなく開いたんだよね。

不思議だったな。それで、表を覗いて見ると、誰もいないんだよね。まあ、月明かりもなかったから辺りがわかるのには少し時間がかかったんだけどね。何もいないんだよ。本当に誰も……。

俺はそれがわかると残りの戸を思い切り開けて、かぶっていた布団を腰まで下げて表に出てみたんだ。そして

「なーんだ。風か。もう驚かせやがって……」って思ってね。でも、念のために辺りを少し歩いてみたんだけどやっぱり誰も何もなかったんだ。

俺はようやく安心して、家の中に入ったんだ。だって、音の正体は「風」だったんだから。

それで戸締りをしっかりして、振り向いて驚いた。

なんと、布団の上にでっかいフクロウがこっちを向いていたんだ。普通のフクロウの倍はあったんじゃないだろうか。何でフクロウがいるんだ……、しかも、いつの間に……。

「お前……、どこから入って来たんだ」そう叫ぶのが精一杯で、あとはフクロウをじっと見ていたんだ。

すると、フクロウは大きく羽を広げて、頭を天井に向けたんだ。俺が（でっかいなあ）って思った瞬間！しゅるしゅると煙が上ってフクロウは俺を追いかけて来たあの大男に変わっていたんだ。それで、布団の上に胡坐をかいてね。

俺はすっかり腰が抜けちゃって、その場にへなへたと座り込んだんだよ。まばたきも忘れて……。俺は涙出て来るし、口は開いたままだし、頭の中も真っ白で……。

でも大男が、「見ツカツタ」って言って、俺の所まで来て俺をつかんで布団の上に座らせたんだ。

俺はまあ、突然の事でびっくりしたけど、以外に冷静に

「そういう時は、『見つかった』じゃなくて『見つけた』って言うんだよ。言ってみな……」なんて言っちゃったんだよ。あの状態でよくあんな事が言えたもんだって思うよね。

そしたら、大男は

「ミツケタ」って言い直してぐふぐふ笑ったんだ。

俺は（いや！こんなことしている場合じゃないんだ……、逃げないと）と思って、振り向こうとしたんだけど、大男が、ガシツと腕をつかんで離さないんだ。それで、又、ぐふぐふ笑って俺を見るんだよね。俺は（殺される。食われる）って思ったね。それで「殺さないでくれ！」って叫んだのさ。すると大男は

「殺サナイデクレ？」って首をかしげて

「殺サナイ！ハイ！ワカリマス」って言って俺の顔を見たのさ。何となくホッとして大男を見て、布団の上で向かい合って座ったんだ。

それでもって、よくよく見れば、本当に大きな顔で、作りも俺とは全然違ってのっぺりとしていないんだよね。彫りの深い顔で、太い眉、厚い唇、白い歯、つるつるの頭で耳もでっかくて福耳、この世の者じゃないな。ってのはわかったけど俺は怖さも忘れて顔を見入ってたんだ。

そしたら、大男が俺の手をつかんで、自分の手と重ねて比べ始めたんだ。そして「チイサイ」って言ってケラケラ笑い出してね。向こうも俺の顔を見て（随分 自分と違うな）って感じていたんだろうな……。

俺は思わず「本当にお前、でっかいなあ」って言うと大男は「デツカイ」って言って両手を広げて、力こぶを出して見せてくれたんだ。その大きいこと。片方の腕だけで、おにぎり五個分はあったのさ。俺はそれを触って

「すんげえ」って喜んじゃったんだ。それで、俺の力こぶを見せたんだけど、あまりの小ささに、大男は布団の上を転げ回って笑ったんだよ。俺だって百姓だから力仕事は得意だけどさ、大男に勝てる訳ないよな。それで、大男のその姿を見て、俺も照れ笑いしてたんだ。

二人は夜遅くまで、互いの足を比べたり、背の高さを比べたり、大男のへその位置が伊助の肩の所にあたりしたのをゲラゲラと笑い転げながら、笑っていました。

伊助には、もう大男に対する恐怖心はすっかり消え、それよりも（こんなに違うのに、ずーっと前から知っていたような。兄弟みたいな感じってこんなかな）とも思い始めていました。そして、

「あのさ、俺の言う事わかる？ お前、名前とかある？ 何ていうんだ？」と聞くと、

大男は、「ウン？」と訳がわからないというような表情をしました。

「名前だよ。名前。俺の名前は『伊助』ってんだ。言ってみな」と言うと、

「名前ダヨ、名前。俺ノ名前ハ、伊助ツテンダ。言ツテミナ」と言いました。

伊助はポカンと口をあけて

「お前って利口なんだか。違うんだか……。でも俺の言った事は全部聞き取れてるんだな。すげえな……」と感心しました。

「いすけ」と伊助は自分の胸をポンと叩くと、大男はポンポンと自分の胸を叩き

「イスケ」と言いました。

「それは、俺の名前だから、お前にも名前が必要なんだよ。どんなんがいいかなあ」と腕を組みながら考えました。

大男も伊助の、真似をして腕組みをして「ウーン」と考える仕草をしました。

「フクロウになって、俺んどこに来たんだから『フク』ってのはどうだ？ 幸福の『福』っえて

意味もあるんだぞ」と言いました。大男は

「フク。フク。名前ヒツヨウ。フク」と言って、自分の胸をうれしそうにドンと一つ叩きました。伊助はちょっと恥ずかしそうに

「フク……」と呼んでみると、大男が

「フク」と応えたので

「そういう時はさ、『ハイ』とか『ナニ』とかって応えるんだよ。それを返事っていうんだ」と教えました。すると、大男は

「ハイ」と元気よく応えました。伊助は

「今日から俺達は兄弟だぞ。本当のじゃないけどさ、フクが俺んどこに来たってのも何かの『縁』だろうからな。お前の方がでかいけど、多分俺の方が年上だよな。だから、俺が兄でお前が弟だ。いいな。」と言うと、フクは

「ハイ」と応えました。

「でさ、俺を呼ぶ時は『兄ちゃん』って呼ぶんだ。言ってみな」と言う

「兄ちゃん」と低く太い声で、フクは言いました。

伊助は照れくさそうにでもうれしそうにしながら、

「何だ？ フク」と応え、二人は楽しそうに笑いました。

伊助はフクが何のために来たのか、などと言うことも聞くことなく、『初めて家族が出来た』という喜びで頭は一杯でした。伊助は

「お前みたいにさあ、でかいのが俺の家にいるのは絶対に隠しておけないし、隠す必要もないし、明日この近所に挨拶に行こうな。なあに、最初はみんな俺みたいに腰抜かすかも知れないけど、そのうち慣れるさ。だって、俺の弟だもんさ。きっとかわいがってくれるさ。俺みたくさ」と言って、フクに笑いかけました。フクも

「兄ちゃん、ワカッタ。挨拶イク」と言い、疲れたのか布団の上にごろんと横になり、鼾をかき始めました。伊助も眠りました。しばらくすると

「フク！フク！ お前の鼾、うるさくて寝られんない。おい。フク」と伊助は言い、耳を塞ぎましたがフクの鼾は止まりませんでした。

伊助はフクの鼻をつまみました。そして、

「おい！ 兄ちゃんが『寝らんない』って言ってるんだぞ」と言ってはっとなりました。

（兄ちゃん……。俺が兄ちゃんになれたのか……）と思い、今まで家族も兄弟もなく暮してきたので、自分で言ったその言葉に一瞬ドキッとさせられたのと、どこから来たのかもわからない者でも『弟』として呼びたくなる程、すでに愛おしく思えてきました。そして、そっとフクに自分の布団をかけ直して自分の耳を塞ぐのを止めて眠りました。

朝になって、伊助は自分の畑で採れた野菜を持ってフクを連れ、フクに自分の着物を着せて挨拶に行きました。しかし、フクはあまりに大きいので伊助の着物は小さく、足りない部分は色々な生地を継ぎ足して何とか出来上がった物でした。伊助はドキドキしながら大きなフクを連れて、まずは隣のおばさんの所へ行きました。

「おばさん！おばさーん。おはよう。伊助です」

「ああ。伊助さんかい。おはよう。ひえーっ、何だい！ 誰だい？ ああ、どうか殺さないでくれ」

「おばさん、違うんだ。違うんだってば……あのね」

「オバサン。オハヨウ。フクト申シマス」と言うと、おばさんは隠していた顔を伊助に向け、「何だい？ 一体どうなっているんだい？」と少し落ちついたおばさんは、伊助に言いました。そして、二人を家の中に入れて伊助がフクと出合った時の事から話しました。

「ふーん。そんな事ってあるのかねえ。不思議なご縁だねえ……」と取り乱した髪を整えながら話を聞いていました。そして、

「そうかい、伊助さんの弟になるのかい……。あんた一人で、真面目に一生懸命働いて来たから、神様もあんたの手伝いをしてくれる人を授けてくれたのかもしれないねえ」と言って、おばさんがおやつに食べようと思って自分で作った団子をフクに

「食べるかい？」と差し出しました。フクは

「ハイ」と応え、おいしそうに目をくるくるさせながらほおばりました。

「おやおや、おいしそうに食べてくれるねえ。うれしいねえ。」と目を細めて言いました。

「わかったよ！フクちゃん、あんた達の事は応援するよ。何か言う奴がいたら、あたしん所において、何でもしてやるからさ。ああそうだ、大家さんそこにはあたしも付いて行くよ。その方がいいだろ？」と言ってくれました。

伊助は

「おばさん。ありがとう」と言い、自分の所の野菜を渡しました。フクもペコリと頭を下げてにっこりと笑いかけました。おばさんはポンと一つ胸を叩き「まかせとき！」と言いました。

数日かけて、おばさんと、伊助とフクは大家さんを始め、近所に挨拶回りをしました。大家さんはフクを見た時、あまりの驚きで、三日間は寝込んだとか。

全く、大家さんの気の小さいのにはあきれられるよな。フクがさ『コンニチハ』って言った途端にバタンだもんな。まあ、最初は俺も驚いたけどさ。でも、大家さんが正気に戻るまで、フクの奴は毎日大家さんの所へ野菜や、誰も知らなかった山にある湧き水を持って行ってたんだ。そしたら、大家さんも漸くフクに馴染んでくれてさ、一緒に住むのを許してくれたのさ。しかも『フクさんの体じゃあの家は狭かろう』って言うてくれてさ、使っていない物入れをつぶしても良いって言うて、広くしてくれたんだ。正直助かったよ。

フクに接する人は皆、最初は驚いて腰抜かすか気絶するかするんだけど、その後は不思議と必ず仲良くなれるんだよ。フクとだけじゃなくて、仲の悪かった人同士でもなんかその人を通して仲良くなっちゃうんだよな。あの大きな手で、ぎゅっと握られたり、体に触ったり、話しただけでね。そうなるんだよ。夜泣きのひどい子もあの大きな体に抱っこされると穏やかになって泣かなくなるんだ。犬だってすぐになつくんだからね。大したもんだ。

フクは伊助の畑を耕して、野菜を作る手伝いをして一緒に働きました。何せ体が大きいので、仕事が速く、草を抜かせても束でぐいぐい抜き、土を掘らせても一度で人の何倍も大きな穴が開きました。

当然伊助の畑は他の人の所とは違い大豊作となりました。

それは、フクが作物を育てる時に

「大キクナアレ オイシクナアレ 兄チャントフクノ野菜タチヨ」

と、必ず声掛けを忘れず、苗を、葉を優しく撫でて育てているせいでした。そして、味も見た目も良い物でした。採れた作物は大八車に乗せて、二人で町に売りに歩きました。

伊助は前から野菜を売りに歩く時は、売り声に節をつけて歩いていました。

「伊助えー。伊助だよっ。おーいしい野菜だよっ。安くておーいしい野菜だよっ」と大きなよく通る声で売り歩きました。今ではフクもその真似をして

「伊助ト、フクダヨ。オイシイ野菜ダヨ。タークサンアルヨ 買ッテオクレー」と自分で考えた節で大八車を引きました。

二人の野菜はいつもすぐに売り切れになって、フクはいつも空になった大八車に伊助を乗せて家に戻りました。

「フク。今日も働いたなあ。全部売り切れだ」

「兄チャン。ヨカッタネ。オ腹空イタ」

「よしよし 帰ったらすぐに飯にしような。そう言えば、俺達の分あったかな」

「兄チャン 少シ畑カラ採ッテ帰ロウヨ」とフクが言いました。

伊助はフクがかわいくてたまりませんでした。

(血がつながっていなくなたって……、こんなにわかりあえる。今まで生きてきて辛い事もあったけど、こんなに幸せな気持ちが味わえるとは……、夢にも思わなかった。誰にどんな感謝をすれば良いのかわからないけど……。幸せだ。本当にフクは『福』だなあ)と大八車に揺られながら、フクの大きな背中を見ながら思っていました。

しばらくして伊助は今住んでいる家の近くに小さな家を建てました。フクと作った作物がよく売れたので、その貯えで出来たものでした。

俺はさあ、『フクと兄弟として暮す』って決めた時から、せめてフクの頭がぶつからないような高さの天井の家と、フクの手足が布団から出ないような所で暮させてやりたいと思ってたんだ。兄チャンとしてはしっかり弟の面倒を見なくちゃならないしな。それからあの事もあってな。あの事ってのはさ、フクが家に来て何日かの夕飯時に、フクがフクロウに戻って葉っぱを突っつき出したんだ。

「フク。お前、何でフクロウになってるんだよ」

フクロウは俯いたまま、足でつかんだ葉を食べていました。

「フク！ 元に戻るんだ！」

するとフクロウはフクの姿に戻っても、やっぱり俯いて目には涙で一杯でした。

俺は、何度も聞いたさ「なあ、ここで暮すのに何か嫌なことがあるなら言ってくれ。お前はもうフクロウじゃないんだ。フクなんだ！ 俺の弟なんだぞ」ってね。

そうしたらやっとなしゃべってくれたんだけど

「お腹スイタ、デモ沢山食ベルト兄チャンノ、ナクナル……」って言ったんだ。俺は頭から水をかけられたような思いがしたんだ。

そして、フクに腹いっぱい食べさせてやれない自分を猛烈に恥じたんだ。その時はまだ、一緒に暮せる事だけがうれしくて、兄ちゃんとしての責任感みたいのが足りなかったんだ……。本当に済まない思いをさせたよ。まあ、その時は畑にあるものを全部持って来て、フクに腹いっぱい食べさせたさ。畑にあった次の日に売る物は無くなったけど、それは又、作ればいいけど、フクの今は今しかないからな。で、俺はその時誓ったんだ。

（もう絶対にフクにひもじい思いは二度とさせない）ってね。だから必死で働いたんだ。まあ、フクにも手伝ってもらってるけどね。

伊助は自分の家を見上げて（良かった……）と心でつぶやきました。

フクは新しい家と、少し大きく作られた大八車にご満悦で

「兄チャン 野菜タクサン乗セラレルネ。と言いながら引っ張りました。

伊助は「ああ、そうだな。と言って、目を細めてフクを見ていました。

ある日、伊助とフクがいつものように畑で働いていると、一人のお役人がやって来ました。名前は『井上直助（いのうえただすけ）』と言いました。主に、伊助達の畑にどれだけの税をかけるかというような調査をしていました。

「伊助！ 伊助はおるか」

「あっ。これは井上様。お仕事ごくろうさまです」

「うん。」

「今日は何か？」

「いやな……。実は町の者から、お前の所に変った同居人がおるとの噂でな、会いに来たとそれとだいぶ稼いで家を建てたそうじゃないか。どんな物かと思ってな」と言いました。

「しかしまあ、お前も頭の良い奴だよなあ。米なら年貢として必ずいくらかは年貢米とせにやならんが、畑作だと、それもいらんしなあ。まあ、好不況なんて米でも畑でもあることだしなあ」

「はい。それを教えてくれたのはフクなんです。俺も最初はフクと『米を作ろう』って言ったんだけど、フクがこの土地を見て、『兄チャン、畑ニシヨウ。畑ノ方ガイイ』って言ったんです。俺は半身半疑だったんですけどね、何かその目が自身ありげだったんで、信じる事にして、畑にしたんです。そしたらやっぱり、フクの言うとおりで正解でした。米なら取られるけど、畑はそういうのないし、良い物を作ればそれだけ儲けになるし『そのお金で米を買えばいい』ってフクが言ったんです」と言う

「ふーん。先見の銘もあったって訳か。なるほどなあ」

「はい。って事は俺も先見の……何でしたっけ？」

「銘だよ」

「あ。先見の銘があったって訳ですよ。なんたって俺の弟なんですから」と言う、井上様は

「まあ、そういうことかもな。でその同居人はどこにおるのだ」と言いました。

「その同居人ならほら、井上様の後ろに……」と伊助が指を差すと、井上様は

「はっ？」と言って振り向くとフクがぬうっとそこに立っていました。

その姿に井上様は

「うわーっ。出たあ」と後ずさりをした拍子につまずいて転んでしまいました。

フクは首にかけていた手ぬぐいで額の汗を拭い、大きな体を折り曲げて

「井上様。オ仕事ゴ苦労様デス」と伊助の言った事を真似して言いました。

井上様は

「コイツ、どこから連れて来たのだ」と伊助に聞きました。

「山です。」と伊助は応えました。

「山なあ。まあ。山だろうな。しかし、でかい。コヤツ何を食うのだ」

「何でも食べます。でも自分で殺生はしません。魚釣りに行っても『イヤダ カワイソウ』って言って逃がしちゃうんで、大変です」と言う

「ふーん。そうか。まあ、優しい目をしておるかな……」と感心したように言いました。そして、フクの周りを何度も回ってはあちこち体を触っていました。

「フクは大キイ、オ役人サマハ小サイ」と言いぐふぐふ笑いました。

フクは井上様に

「オ役人様。名前アル？」

「あるともさ、わしは井上直助と申す者だ」と言う

「イノウエ？ ワシはフクと申す。兄チャンがツケテクレタ。井上様モ兄チャンニツケテモラッタカ？」

「いやいや、わしは親にだ」

「フクモ井上様モ、良イ名前」と言い、にこにこすると、井上様は

(不思議な奴だなあ。コイツを見てると心が穏やかになっていく……) と思っていました。

「井上様。兄チャンイル？」とフクが聞くと

「いや、おらぬ。嫁いだ妹と、母親と妻だ」

「皆、仲良シ？」と更に聞いて来たので、井上様は聞かれた勢いで、

「いや、それが、妻と母親の折り合いが悪くてなあ、二人はもう何年も口をきいてはおらんのだ。同じ家に居るのにだ……。全く……。まあ、子どもおれば『<sup>かすがい</sup>鏝』になってくれたのだろうけれど、おらんでなあ。まあ、頭の痛い事よ。」と言って、すぐに

(あっ、しゃべり過ぎた) というような表情になり一つコホンと咳払いをしました。

「フク、見て」と言うので井上様が振り向き、フクを見ると

井上様の眼にフクが映って、じっと見ていました。少しの間そうしていましたが、フクはそれを確認すると

「モウ大丈夫！ 皆、仲良し」と言って、又ぐふぐふ笑いました。

井上様は何の事かわからず、不思議そうに首をかしげながら、少し伊助と話をした後、帰って行きました。

井上様が仕事を終えて家へと向いながら

(何やら不思議な奴だが……。憎めない奴だ……) と思いながら歩いていると、ほどなく家に着

きましたが家の中から笑い声がしているのに気がつきました。

（客でも来てるのか？）そんな事はもう何年も無かった事だったので、空耳かも知れないと立ち止まり、耳を澄ましました。

すると、やっぱり井上様の家の中からその声はしていました。しかも聞き覚えのある声で……。それは、仲の悪い母親と妻の声でした。

「そんなばかな。でも、喧嘩をしておるようには聞こえんが……」と言うと、すぐには家に入らず、庭へと回り庭木の間から家の中の様子を伺いました。よく見ても、確かに母親と妻の声でした。

二人は向かい合って何かを手にとって、楽しそうにケラケラと笑っていたのでした。

「まあ、お母様ったら、こんな事ってあるのですねえ」

「本当に……。二人で別々に出たのに同じ物を買うなんて……」と話していたのでした。

井上様は半信半疑のまま、庭から出て家の中へ入りました。

「……今、……帰ったぞ」と中の様子を伺いながら、やや小さな声で言うと、二人は笑いながら出迎えに玄関までやって来ました。

「おかえり」

「おかえりなさいませ。お仕事ご苦労様でした」

「うん。あの……。何か笑っていたようだったが、何かあったのか？」と上目づかいに母親を見ると、

「それがねえ、今日私が町に買い物に出かけたのよ。そしたら、ふと、きれいな半襟を見つけてねえ、（しづさんにどうだろうか）って思ったもんだから買ったのよ、そうしたら……」と言うとまた笑い出して話せなくなったので、今度は妻が

「私はお母様が出かけたのも知らないで、出かけたんですけれど、私も町を歩いていて何となく呉服屋を覗いて、お母様に似合いそうな半襟を見つけたので、買ってきたんです。そしたら……」と今度は、又妻が笑い出しました。

「そしたらねえ、色は違うんだけど、全く同じ柄の半襟を私たちお互に買ったのよ。それぞれに似合うんじゃないかってね。こんな事は初めてだから、可笑しくって」と言い妻と頷きながら又笑いました。井上様は

（こんな姿が見たかったのだ……。こうなる事を望んでいた。良かった。お互いの事を思いやってくれている。やっと、気付いてくれたのか、それにしても、今まで何十年も買い物に行ったって、こんな事はなかったのに、今更……）と、思いました。

すると、突然「フクか！」と叫んだので「『フク』って何？」と、しづさんが聞きました。

二人に伊助の所にいるフクの話をしました。

井上様は、フクが『皆、仲良し……』と言って、じっと目を見られたのを思い出したのでした。

フクの手とは俄かに信じがたい事でしたが、フクと会った以外は他に何かあったわけではなかった。他の理由は考えられませんでした。フクの見えない力が二人に働いて、二人は心の引出しに（本当は仲良くしたかったけれどきっかけがない）その二人の思いをフクが引き出して、二人を仲良くさせてくれたのだと思う事にしました。

その夜、井上様の家はいつもより明るく照り、いつまでも笑い声が聞こえていました。

何日すると、又、井上様が伊助の所へやって来ました。

「おーい。伊助。フク。いるか？いないのか？」

「あ。井上様」

「ア！井上様ダ」

「おお、二人共居るか」井上様は両手一杯の荷物を高々と上げて見せました。伊助が

「今日は又何か？」

「いやいや、あのな、実は、この間の礼と言うか……」

「礼？ ですか」

「実はなあ、あの後、家に帰ったらな、妻と母親が実に仲良くなっておってなあ、それから家の中に笑い声が絶えなくなったんだ。でな、他に理由もわからんし、あの時、フクに何か眼には見えんけど、力をもらったんじゃないかと思ってな、いや、それ以外には考えられんものでなあ。思い出しても……それで、その礼で来たんだ……」

伊助は

「でしよう？フクのそばにいるとき、何かそんな力が寄って来て、みんな仲良くなれるんですよ。」

「ソウ、皆、仲良シニナル」と言ってフクは胸を張って見せました。

井上様は持っていた包みをフクに渡して

「ほれ、フク、食べてくれ」と言いました。

フクは大きな手で、包みを大事そうに開けました。

それを見た井上様は

「ほう、なかなか器用だなあ。でかくて指も太いから、開けられんかと思っただが。」と言いました。フクは中から団子の包みを取り出して

「ウワー、団子ダ！」と言って両手に持ってむしゃむしゃ食べ出しました。

「これこれ、こっちの包みも開けんか」と井上様が言ったので伊助が開けて見ると、中にはでっかい着物が入っていました。

「わあ。でっかい着物」と、伊助が驚くと

「いやあ、なに、わしの着なくなったやつを何枚かほどいて仕立て直したらしい。

妻と母親でな。二人で『こんな大きな物作った事がない』って、楽しそうにしておったな。わしはそれを見るだけで胸が熱くなったよ。フクありがどうな」とその情景を思い出したのか、少し遠くを見るような目で言いました。

「……それで、まあ、フクの着物がつんつるてんなのを思い出してな、伊助の弟としても恥ずかしからうと思ってな……、まあ、着せてやってくれ」と、言いました。

伊助はそのでっかい着物を広げ、フクに合わせ

「フク、着てみな」と夢中で団子を食べていたフクに言いました。

フクは団子を置いて、その着物にそでを通すと、これが又、測ったようにぴったりでした。「ウレシイ、アリガトウゴザイマス」そう言って、何度も大きな体を折り曲げて、頭を下げました。

俺もうれしくて涙が止まらなかったんだ。着物の事は俺も気になっていたからさ。俺も自分のを足して俺なりに作っていたんだけど、俺の着物なんてぼろぼろだから、あちこち薄くなっていて、つぎはぎだらけで、だけどさ、又、そこから破けるんだよね。近所の人にもらったりしたんだけど……、全然持たないんだ。フクの体だから、仕方ないけど、兄ちゃんとしては、弟が変な格好してると困るんだよね、だから本当にありがたかったよ……。

フクは井上様がくれた着物を着て、おいしい団子を食べ、さらに井上様が下げて来た大きな魚を持ち、ご機嫌でした。

伊助も何度も頭を下げ、井上様もフクの着物姿を見上げながら、「いやあ、こうして見ると、実にりっぱだなあ。しかし、うちの女房達の腕も大したもんだなあ。測ったように寸法が合ってるじゃないか」と感心しながらフクの周りをひと回りしました。「うんうん、フク、よく似合ってるぞ。その姿、うちの女房達にも見せに来てやってくれ。自分達の作った物が、役に立ったとわかれば又、喜びもひとしおだろうしな」と言ってフクのお腹をポンと叩きました。フクは

「ハイ。ワカリマシタ。兄チャント行キマス」と言ってぐふぐふと笑いました。

井上様は

「うん。よかった。よかった。フクと会ってからは、良い事ばかりが続く気がするぞ」と頷きながら

「又、寄せてもらうからな」と、手を振りながら帰って行きました。

その晩、フクも伊助もうれしくて、中々寝付けませんでした。

伊助は

「フク、もう脱がないと、破れちゃうぞ」と声を掛けましたが、フクは両手を広げてうれしそうに

「大丈夫、大丈夫。井上様イイ人、友達ニナツタ」と言ってそこらじゅうをくるくる回って喜びました。伊助も井上様の『情』とフクの笑った顔がうれしくて又、涙ぐんでしまいました

「兄チャン、ドウシタ？ 泣イテルノ？」と伊助の顔を覗き込んだので

「あんまりうれしくて、涙が出たんだよ。うれしくても涙は出るものなんだよ、そのうちおまえにもわかるよ」と言うと、フクは眼をぎゅっつつぶり、涙を絞り出して

「フクモ、ウレシ泣キ、出来タ」と言って満足そうな顔をしました。

俺は、その顔がおかしくて、又、涙が出ちゃったんだ。

伊助達はフクの着物があんまり汚れないうちにとあって、井上様の家にお礼に行きました。案の定、フクを見た井上様のお母様はフクの大きさに腰を抜かし、奥様のしづさんはぽかんと口を開けたままになってしまいました。けれど、フクの礼儀正しさと持前の愛嬌ですぐに馴染んでくれました。フクはお母様の肩を叩いたり、水汲みを手伝ったりして、大変喜ばれま

した。そして、又、たくさんのおみやげをもらって帰ってきました。

「兄チャン、楽シカッタネエ」

「ああ、そうだな。皆、良い人でよかったな。又、何か手伝いに来ような」

と言うと、フクはひょいと伊助を持ち上げて、自分の肩に乗せて歩き出しました。

俺は、フクの高さに本当に驚いた。最初は高くて怖かったけど、兄ちゃんだからさ、怖がるのも格好悪いしね、なんでもない顔をしてがんばったけどね。

(こんな空に届きそうな景色をいつもフクは見ているんだ) と思ったね。

そして、伊助はフクの頭につかまって、うれしそうにゆっさゆっさと揺られて行きました。

「フク、重くないか？」

「大丈夫、任セテ。兄チャン、軽イ軽イ」とぐふぐふ笑いながら歩きました。

その日の夕焼けは、伊助が生まれて初めて見たような色で、美しく、つかめるんじゃないかと思えたので、両手を伸ばしてみましたが、あと少しか、というところでした。

「フクのかたぐるまでもやっぱり空には届かないな」

「兄チャン大丈夫。キット届クヨ、イツカ……」

「そっか。行ってみたいもんだな……」と言いました。

フクは笑って肩を上げ下げして俺を揺らして、喜んでいた。

「フク、止めろって！ 落ちるって！」と言いました。

(ああ、家族って、こんなもんなんだなあ。いいもんだなあ) としみじみ思い、本当にフクとの出会いに感謝していました。

伊助達は家に帰っても、井上様の家での事をいつまでも話しました。

その後も、井上様は伊助達の所にフクへ自分のお古の着物などをせつせと持って来るようになりました。

ある時、井上様がやって来て三人で話していた時

「近頃、米が採れんでなあ。米作りは本当に頭を抱えておるんだ」

「なんでですか」

「話し、聞いておらんのか」

「はい」

「まあ、ここのお前の回りではそうでもないんだが、一つ向こうの山を越えた所は、困っておるんだ」

「何デデスカ。井上様」とフクはきちんと正座をして話を聞こうとしました。

「しかし、お前は正座しても、大きいなあ。まあ、楽にしろ」と言ってくれたので、伊助は

「フク、足、伸ばしても良いんだって」と言ってやりました。

フクは足を伸ばしても、楽に井上様の所まで届いてしまう程でした。

その長い足を眼で測りながら、くわしく話し始めました。

「一つ向こうの山の田はなあ、山を切り崩し、崩し田を広げて、むりやり水を引いて来て灌漑を始めてだ、田を増やしたんだ。それでも、自分達の身の丈に合う程にしておけば良いものを、もつともつと、欲が出たんだろうなあ」

「でも、そんなに作ってどうするんですか？」

「そりゃあ、お前たくさん作って、儲けて金がたくさんあった方が、出来る事の数も増えるだろうし、暮らしも豊かになるだろうよ。新しい立派な家、きれいな着物、人を使えば自分は汚れる事もなくなるからな」

「ふーん。で、うまくいったんでしょ？」

「ああ、何年かは良かったんだ。天候の良かったのも手伝って、豊作でな、年貢もたくさん納めてもらったし、それでもまだ、大分余裕があったんじゃないのかな」

「じゃあ、よかったんですねえ」

「ソウ、ヨカッタ、ヨカッタ」

「まあ、でもなあ、世の中そんなに良い事ばかり続かないもんだぞ。わしの長い経験でも『無理をすれば道理が通らず』ってな、いつかはしっぺ返しが来ると、大体相場が決まっておるものだ。おまえだって、フクが来る前は、一人で苦勞しただろう。野菜だって、採れる時と採れない時もあっただろうし……」

「でも、俺は、俺が食べていける分以上の事ってあんまりしなかったし、独り身だから、それ以上の事も願わなかったです」

「それが、利口だな、やっぱり欲が出すぎると人間、良くない事が良い事を追い越して先を歩き始めるってもんなんだなあ」としみじみ言いました。

フクもじっと井上様の目を見ながら話を聞いていましたが、ふと思い出したようにむくっと立ち上がり水場に行って何かを持って来ました。

「井上様、ドウゾ、お召シ上がり下サイ」と形は悪いけれど、団子を出しました。

「なんだ、これはフクが作ったのか？」

「フクのやつ、井上様の所でいただいた団子が忘れられなくて、あれから自分なりに作ったんです。いろんな野菜で試しに作ったんですよ。どうですか？ 食べてみて下さい」と言うと

「ドウデスカ」とフクも続いて言いました。

「しかし、フクは兄ちゃん孝行な弟だなあ。なあ、伊助。うん？ これはイケル、うまいぞ、フク、大したもんだなあ」

「そうでしょうか？ 俺もそう思っているんです。これは茹で立てもおいしいけど、少し時間がたってもおいしいんですよ。俺もフクの腹の足しに作っておいてあるんです」と言いました。

「相変わらずお前達は仲の良い兄弟だなあ。お互いを思い合って……、あの町の者達もそんな気持ちがあればあんな事にはならなかったものを……」

フクはおいしそうに自分の団子を食べながら、

「井上様、マダマダ沢山アルヨ」と言って井上様に団子を勧めました。

話がひとしきり終わると、井上様は帰ろうとしました。すると、フクは

「コレ、奥様トお母様ニ、お土産デス、食べテモラッテ下サイ」

ろ、器用に包んだ包みを渡しました。

「すいません。フクがどうしてもお二人にも食べてもらいたって言うもので……。御願います」

「いやいや構わない。気にするな。驚くけど、きっと喜ぶぞ二人共」と、うれしそうに団子の包

みを受取ってくれました。

フクは少し恥ずかしそうに、伊助を見ました。

伊助も「うんうん。」と頷いて、フクを見ました。

「では、又来るからな。一つ向こうの山の件だがな、何か良い案でも浮かんだら二人共わしに教えてくれないか。いろんな人の意見を聞いて参考にして、何とかしたいと思ってるんでな」と言  
って軽く手を振って、フクの団子の包みの匂いを嗅ぎながら、帰って行きました。

伊助とフクは

「はい、わかりました。ご苦労様でした」

「ハイ、ワカリマシタ。ゴ苦労サマデシタ。又、来テ下サイ」

と言って見送りました。

伊助は

「こんなきれいな夕焼けの下で、皆が俺達みたく幸せに生きているって訳じゃないんだな。

と言うと、

「皆、仲良く、山、怒ル……」とフクはぽつんと言いました。

フクの手とは俄かに信じがたい事でしたが、フクと会った以外は他に何かあったわけではなかった。他の理由は考えられませんでした。フクの見えない力が二人に働いて、二人は心の引出しに（本当は仲良くしたかったけれどきっかけがない）その二人の思いをフクが引き出して、二人を仲良くさせてくれたのだと思う事にしました。

その夜、井上様の家はいつもより明るく照り、いつまでも笑い声が聞こえていました。

何日すると、又、井上様が伊助の所へやって来ました。

「おーい。伊助。フク。いるか？いないのか？」

「あ。井上様」

「ア！井上様ダ」

「おお、二人共居るか」井上様は両手一杯の荷物を高々と上げて見せました。伊助が

「今日は又何か？」

「いやいや、あのな、実は、この間の礼と言うか……」

「礼？ ですか」

「実はなあ、あの後、家に帰ったらな、妻と母親が実に仲良くなっておってなあ、それから家の中に笑い声が絶えなくなったんだ。でな、他に理由もわからんし、あの時、フクに何か眼には見えんけど、力をもらったんじゃないかと思ってな、いや、それ以外には考えられんものでなあ。思い出しても……それで、その礼で来たんだ……」

伊助は

「でしよう？フクのそばにいるとき、何かそんな力が寄って来て、みんな仲良くなれるんですよ。」

「ソウ、皆、仲良シニナル」と言ってフクは胸を張って見せました。

井上様は持っていた包みをフクに渡して

「ほれ、フク、食べてくれ」と言いました。

フクは大きな手で、包みを大事そうに開けました。

それを見た井上様は

「ほう、なかなか器用だなあ。でかくて指も太いから、開けられんかと思っただが。」と言いました。フクは中から団子の包みを取り出して

「ウワー、団子ダ！」と言って両手に持ってむしゃむしゃ食べ出しました。

「これこれ、こっちの包みも開けんか」と井上様が言ったので伊助が開けて見ると、中にはでっかい着物が入っていました。

「わあ。でっかい着物」と、伊助が驚くと

「いやあ、なに、わしの着なくなったやつを何枚かほどいて仕立て直したらしい。

妻と母親でな。二人で『こんな大きな物作った事がない』って、楽しそうにしておったな。わしはそれを見るだけで胸が熱くなったよ。フクありがとうな」とその情景を思い出したのか、少し遠くを見るような目で言いました。

「……それで、まあ、フクの着物がつんつるてんなのを思い出してな、伊助の弟としても恥ずかしからうと思ってな……、まあ、着せてやってくれ」と、言いました。

伊助はそのでっかい着物を広げ、フクに合わせ

「フク、着てみな」と夢中で団子を食べていたフクに言いました。

フクは団子を置いて、その着物にそでを通すと、これが又、測ったようにぴったりでした。「ウレシイ、アリガトウゴザイマス」そう言って、何度も大きな体を折り曲げて、頭を下げました。

俺もうれしくて涙が止まらなかったんだ。着物の事は俺も気になっていたからさ。俺も自分のを足して俺なりに作っていたんだけど、俺の着物なんてぼろぼろだから、あちこち薄くなっていて、つぎはぎだらけで、だけどさ、又、そこから破けるんだよね。近所の人にもらったりしたんだけど……、全然持たないんだ。フクの体だから、仕方ないけど、兄ちゃんとしては、弟が変な格好してると困るんだよね、だから本当にありがたかったよ……。

フクは井上様がくれた着物を着て、おいしい団子を食べ、さらに井上様が下げて来た大きな魚を持ち、ご機嫌でした。

伊助も何度も頭を下げ、井上様もフクの着物姿を見上げながら、「いやあ、こうして見ると、実にりっぱだなあ。しかし、うちの女房達の腕も大したもんだなあ。測ったように寸法が合ってるじゃないか」と感心しながらフクの周りをひと回りしました。「うんうん、フク、よく似合ってるぞ。その姿、うちの女房達にも見せに来てやってくれ。自分達の作った物が、役に立ったとわかれば又、喜びもひとしおだろうしな」と言ってフクのお腹をポンと叩きました。フクは

「ハイ。ワカリマシタ。兄チャント行キマス」と言ってぐふぐふと笑いました。

井上様は

「うん。よかった。よかった。フクと会ってからは、良い事ばかりが続く気がするぞ」と頷きながら

「又、寄せてもらうからな」と、手を振りながら帰って行きました。

その晩、フクも伊助もうれしくて、中々寝付けませんでした。

伊助は

「フク、もう脱がないと、破れちゃうぞ」と声を掛けましたが、フクは両手を広げてうれしそうに

「大丈夫、大丈夫。井上様イイ人、友達ニナツタ」と言ってそこらじゅうをくるくる回って喜びました。伊助も井上様の『情』とフクの笑った顔がうれしくて又、涙ぐんでしまいました

「兄チャン、ドウシタ？ 泣イテルノ？」と伊助の顔を覗き込んだので

「あんまりうれしくて、涙が出たんだよ。うれしくても涙は出るものなんだよ、そのうちおまえにもわかるよ」と言うと、フクは眼をぎゅっつつぶり、涙を絞り出して

「フクモ、ウレシ泣キ、出来タ」と言って満足そうな顔をしました。

俺は、その顔がおかしくて、又、涙が出ちゃったんだ。

伊助達はフクの着物があんまり汚れないうちにとあって、井上様の家にお礼に行きました。案の定、フクを見た井上様のお母様はフクの大きさに腰を抜かし、奥様のしづさんはぽかんと口を開けたままになってしまいました。けれど、フクの礼儀正しさと持前の愛嬌ですぐに馴染んでくれました。フクはお母様の肩を叩いたり、水汲みを手伝ったりして、大変喜ばれま

した。そして、又、たくさんのおみやげをもらって帰ってきました。

「兄チャン、楽シカッタネエ」

「ああ、そうだな。皆、良い人でよかったな。又、何か手伝いに来ような」

と言うと、フクはひよいと伊助を持ち上げて、自分の肩に乗せて歩き出しました。

俺は、フクの高さに本当に驚いた。最初は高くて怖かったけど、兄ちゃんだからさ、怖がるのも格好悪いしね、なんでもない顔をしてがんばったけどね。

（こんな空に届きそうな景色をいつもフクは見ているんだ）と思ったね。

そして、伊助はフクの頭につかまって、うれしそうにゆっさゆっさと揺られて行きました。

「フク、重くないか？」

「大丈夫、任セテ。兄チャン、軽イ軽イ」とぐふぐふ笑いながら歩きました。

その日の夕焼けは、伊助が生まれて初めて見たような色で、美しく、つかめるんじゃないかと思えたので、両手を伸ばしてみましたが、あと少しか、というところでした。

「フクのかたぐるまでもやっぱり空には届かないな」

「兄チャン大丈夫。キット届クヨ、イツカ……」

「そっか。行ってみたいもんだな……」と言いました。

フクは笑って肩を上げ下げして俺を揺らして、喜んでいた。

「フク、止めろって！ 落ちるって！」と言いました。

（ああ、家族って、こんなもんなんだなあ。いいもんだなあ）としみじみ思い、本当にフクとの出会いに感謝していました。

伊助達は家に帰っても、井上様の家での事をいつまでも話しました。

その後も、井上様は伊助達の所にフクへ自分のお古の着物などをせつせと持って来るようになりました。

ある時、井上様がやって来て三人で話していた時

「近頃、米が採れんでなあ。米作りは本当に頭を抱えておるんだ」

「なんでですか」

「話し、聞いておらんのか」

「はい」

「まあ、ここのお前の回りではそうでもないんだが、一つ向こうの山を越えた所は、困っておるんだ」

「何デデスカ。井上様」とフクはきちんと正座をして話を聞こうとしました。

「しかし、お前は正座しても、大きいなあ。まあ、楽にしろ」と言ってくれたので、伊助は

「フク、足、伸ばしても良いんだって」と言ってやりました。

フクは足を伸ばしても、楽に井上様の所まで届いてしまう程でした。

その長い足を眼で測りながら、くわしく話し始めました。

「一つ向こうの山の田はなあ、山を切り崩し、崩し田を広げて、むりやり水を引いて来て灌漑を始めてだ、田を増やしたんだ。それでも、自分達の身の丈に合う程にしておけば良いものを、もつともつと、欲が出たんだろうなあ」

「でも、そんなに作ってどうするんですか？」

「そりゃあ、お前たくさん作って、儲けて金がたくさんあった方が、出来る事の数も増えるだろうし、暮らしも豊かになるだろうよ。新しい立派な家、きれいな着物、人を使えば自分は汚れる事もなくなるからな」

「ふーん。で、うまくいったんでしょ？」

「ああ、何年かは良かったんだ。天候の良かったのも手伝って、豊作でな、年貢もたくさん納めてもらったし、それでもまだ、大分余裕があったんじゃないのかな」

「じゃあ、よかったんですねえ」

「ソウ、ヨカッタ、ヨカッタ」

「まあ、でもなあ、世の中そんなに良い事ばかり続かないもんだぞ。わしの長い経験でも『無理をすれば道理が通らず』ってな、いつかはしっぺ返しが来ると、大体相場が決まっておるものだ。おまえだって、フクが来る前は、一人で苦勞しただろう。野菜だって、採れる時と採れない時もあっただろうし……」

「でも、俺は、俺が食べていける分以上の事ってあんまりしなかったし、独り身だから、それ以上の事も願わなかったです」

「それが、利口だな、やっぱり欲が出すぎると人間、良くない事が良い事を追い越して先を歩き始めるってもんなんだなあ」としみじみ言いました。

フクもじっと井上様の目を見ながら話を聞いていましたが、ふと思い出したようにむくっと立ち上がり水場に行って何かを持って来ました。

「井上様、ドウゾ、お召シ上がり下サイ」と形は悪いけれど、団子を出しました。

「なんだ、これはフクが作ったのか？」

「フクのやつ、井上様の所でいただいた団子が忘れられなくて、あれから自分なりに作ったんです。いろんな野菜で試しに作ったんですよ。どうですか？ 食べてみて下さい」と言うと

「ドウデスカ」とフクも続いて言いました。

「しかし、フクは兄ちゃん孝行な弟だなあ。なあ、伊助。うん？ これはイケル、うまいぞ、フク、大したもんだなあ」

「そうでしょうか？ 俺もそう思っているんです。これは茹で立てもおいしいけど、少し時間がたってもおいしいんですよ。俺もフクの腹の足しに作っておいてあるんです」と言いました。

「相変わらずお前達は仲の良い兄弟だなあ。お互いを思い合って……、あの町の者達もそんな気持ちがあればあんな事にはならなかったものを……」

フクはおいしそうに自分の団子を食べながら、

「井上様、マダマダ沢山アルヨ」と言って井上様に団子を勧めました。

話がひとしきり終わると、井上様は帰ろうとしました。すると、フクは

「コレ、奥様トお母様ニ、お土産デス、食べテモラッテ下サイ」

ろ、器用に包んだ包みを渡しました。

「すいません。フクがどうしてもお二人にも食べてもらいたいわうもんで……。御願います」

「いやいや構わない。気にするな。驚くけど、きっと喜ぶぞ二人共」と、うれしそうに団子の包

みを受取ってくれました。

フクは少し恥ずかしそうに、伊助を見ました。

伊助も「うんうん。」と頷いて、フクを見ました。

「では、又来るからな。一つ向こうの山の件だがな、何か良い案でも浮かんだら二人共わしに教えてくれないか。いろんな人の意見を聞いて参考にして、何とかしたいと思ってるんでな」と言  
って軽く手を振って、フクの団子の包みの匂いを嗅ぎながら、帰って行きました。

伊助とフクは

「はい、わかりました。ご苦労様でした」

「ハイ、ワカリマシタ。ゴ苦労サマデシタ。又、来テ下サイ」

と言って見送りました。

伊助は

「こんなきれいな夕焼けの下で、皆が俺達みたく幸せに生きているって訳じゃないんだな。

と言うと、

「皆、仲良く、山、怒ル……」とフクはぽつんと言いました。

「そうだなあ、山、怒ってるのかもしれないな」

「ウン、怖い、大変」

「うーん、どうしたもんかなあ。まあ、ゆっくり考えようぜ。フク、ほら家に入った、入った」

「ハイ、兄チャン」とフクは応え、二人は家に入り、夕飯の支度に取り掛かりました。

フクは

「兄チャン、米食ベレナクナルノ？」と聞いたので

「そんな時は、そんな時さ。家は野菜もあるし、お前の団子だって作り置き出来るだろう。まあ、何とかなるさ。心配するな」と言うのでフクはほっとしたように

「ウン、そうだ、ナントカナルサア」と訳のわからない節をつけて歌いながら、飯が炊ける湯気に体を合わせて、くねくねと踊りました。

俺もそれに連られて、歌ったんだ。楽しかったなあ。あん時は。

それから、何日かたったある日の事、俺とフクは、いつものように畑仕事をしていると草取りをしていたフクが、つと立ち上がって、山の方を見て言ったんだ、俺は

「フク、どうした。うん？」

「兄チャン、山、見ニ行コウ。山ノ向コウヘ見ニ行コウヨ」と言って、長い腕で山を指差したんで、俺も

「そうだなあ、行って見るか。井上様の話だろ？フクも気にしてたのか。そうか……。

歩いているうちに、何か良い考えの一つでも浮かぶかも知れないしなあ」

「兄チャン、団子持ッテ行コウ」

「それはいいけど、おまえ、ただの遠出じゃないか。それじゃあ。まあ、いつか。畑のほうもじきに一区切りつくしな。うん、そうしよう。そうと決まれば、早く済ましちやおうぜ。」と言って俺達は仕事を終わらせて、家に戻り、二人揃いの竹筒に、水を入れて、腰にぶら下げて、団子を持って、山の向こうの町へと歩き出したんだ。

二人は、山道のあちこちを寄り道しながら歩きました。

フクは、蝶を追いかけて、花の香りを嗅ぎ、伊助は穴から急に飛び出して来た野うさぎを偶然捕まえることが出来たので、フクに「おい。フク、ほら、今夜のおかず」とニヤニヤしながら見せました。フクはすぐ怒って、どかどかと伊助に詰め寄って来て、伊助の手から野うさぎを取り上げ「兄チャン、ダメ、ソレ、カワイソウ」と言って野うさぎを穴にそっと返しました。

「ゴメンナサイネ。」と野うさぎに言って、くるりと振り向き、伊助を睨む様に口をとんがらせると、伊助は

「ははは、冗談だよ。そんなことしないさ。お前も、変だよなあ、形を変えれば肉も食うのに、自分からは絶対に殺生しないのな」と言うと、フクは

「兄チャンニ似テ、優シイ」と言って、自分の胸を叩いたので

「ああ、その通りさ」と伊助もフクのお腹をぽんと一つ叩きました。

二人は、遊びながらも漸く、山の半分の所までたどり着き、山の向こうの町が見える所まで、来ました。

その先に広がっていた様子に、二人は呆然と立ち尽くしました。

「なんだこれ。山の半分、ないじゃないか」

「山ニ、草ナイ、水モナイ」

そこには、山の半分側のほとんどが切り崩され、枯れかかった田が広がっていました。

伊助とフクのいる側の山は青々と草木が繁り、水も豊かでしたが、それとは全く対照的な風景で、山を崩した分だけ田の数は多かったのですが、田として、とても稲が出来るようなものではありませんでした。

「どうすんだ、こんなことして……」

「稲、下向イテ泣イテル、カワイソウ」

「稲もそうだけど、人の姿っていうか、活気が無いな。町に……、あんまり人歩いてないな。俺達のところとは随分違うもんだなあ」

「山ノ神様、怒ツタノ？」

「そうかもしれないなあ。あんまり人間が自分達のわがままを通そうとしたから、罰があたったのかもなあ。言ってる事わかるか？」

「ヨク、ワカルヨ。兄チャン」

「早いとこ下まで降りて、もっとよく見てみようぜ」

「ウン」そう言って二人は今度はほとんど、崖のような所を足元を気にしながら歩いて行きました。

しかし、道も無く、土と岩だらけの場所では足を取られ、とても歩きづらく

「うーん、なかなかかどらないなあ。フク、足元気をつけろよ。落ちるなよ。いいかこうやって、あちこち出っ張っている岩につかまりながら、後ろを向いて、尻を下にしてゆっくり降りるんだ」

「ワカッタ、兄チャン、コウ？」

「そう、そう。ゆっくりだ」

それでも二人は、崖の半分近くまで降り進みました。

「ふう、やっとここまで来れたな。ここまで来れば、あと、もう一歩だ。フク、少し休むか？」と言ひ。汗を拭ひフクを見ると。フクも額に、玉のような汗をかいていて、伊助の側で大きな岩に腰をかけました。

「いやいや近くで見ると、これはもっと大変なんだな。ほとんどの家が田んぼなんだな。俺達みたいに、畑にしている所はないじゃないか。こりゃ大変だ」と言うと、下の方を見ていたフクが、突然立ち上がって

「兄チャン、アレ、井上様？」

「どれ？ どこ？」

「ホラ、アソコ、田ンボノ側デ、シャガンデル」

「はあ？ どこだよ。お前眼良いなあ。あつ、あれか、おーい、おーい、井上様あ。」って俺が叫ぶと、フクの奴うれしかったんだか大声で

「井上様ア、コンニチハ。オーイ」って叫んだんだ。そしたらその大きな声が山びこになって井上様に届いたんだよね。

最初は辺りをきょろきょろしていたんだけど、俺達に気がついて、大きく手を振ってくれたんだ

。そしたら、フクも急にその場で飛び跳ねて、大きく手を振ってどしどしやるもんかだから、足場が崩れて、フクの奴、ごろごろと落ちちゃったんだ。

「フク！オーイ。止まれ」

「兄チャン。助けテ」

「どうしよう。どうしよう」って、俺もあわてて滑り落ちながら、大岩のように落ちて行くフクの後を追ったんだ。そして、何よりもフクが落ちて行っている先には、井上様が驚いて突っ立ったままだったんだ。どいてくれれば良いものを、フクの大きな塊を見て。自分もすっかり動けなくなっちゃって、フクを指差して

「ああああ、フク、来るな！こっちへ来るな」って両手を振って叫んでたんだけど、フクはもうどうにも止まる事が出来なくなってたんだ。

「フクー」

「兄チャン！」

ものすごい震動と共にフクの体は井上様めがけて転げ落ち、見事に井上様激突して、漸く止まりました。フクと井上様は大きな一塊となって、地面で砂埃をあげていました。

フクに漸く追いついた伊助は、フクと井上様が無事な様子だったので

「フク、やっと止まったか……。怪我、無いか？」と聞くと、フクは

「大丈夫！」と元気に応え

「兄チャン、井上様ドコ？」と言ったので、伊助がフクの下じきになっているのを指差すと

「ア！井上様、ソコデ何シテルノ？」と聞きました。

「ばか者！早くどかないか、息が止まるわ」と言いました。

フクは井上様の上からどいて、手を引っ張って井上様を立たせ

着物の土を叩いて払いました。

「ああ、もういい。ますます痛くなるわ。全く、お前の力加減ときたら、本当に見たままだなあ。本当にもう……」と言いました。

フクが少しきよとんとしたのを見た伊助は

「でも、井上様も、フクの事、かわいいと思っているんですよね。」とにやにやしながら聞くと

「ん？ うん、まあな」と言ったので、フクもすぐにぐふぐふといつものように笑いました。

「井上様、ゴメンナサイ、フク、重イ、痛クシタ？」

「まあ、いいさ。お前こそ、怪我ないか？ お前でっかいから。ああ、こんなに擦り剥いて、水で土、洗い流しておけ」そう言って井上様は、自分の竹筒の水をフクの擦り傷にかけて、土を洗い流してくれました。伊助は

「井上様すみません」と言い自分の竹筒の水を井上様の竹筒に移し替えました。

井上様とフクは土だらけの体をなんとか払い、漸く一心地つき、偶然、三人揃って一つ大きな深呼吸をしました。

「お前達も、見に来たのか」

「はい。フクが『山の向こうに行って見たい』って言うもんでどうなっているのかと思って来てみました」

「うん。そうか」

「井上様ニ会エタ。ウレシイ」

「まあ、こんな偶然もあるもんだなあ」と井上様はあちこちを見まわしながら言いました。

「どう思う？」

「こんなになってたですね。これはひどいです」

「カワイソウ」とフクが言うと、伊助も

「こうなったらもうどうにもならないんじゃないかなあ。町ごとどこかに移り住むとかしないとなあ。この土地じゃなあ」と悲しそうに眉間に皺を寄せて言いました。

すると、フクが

「兄チャン、腹ヘツタヨ」

「そうだな、井上様、どこかに腰掛けて、昼にしませんか」と、持って来た団子を持ち上げました。

「おう、そうする」と言って、井上様も背中に背負っている風呂敷から、塩むすびを取り出しました。そして、三人は、枯れた田に背を向けて、足を投げ出して座り、食べました。井上様が「相変わらず、うまそうな団子だなあ。わしの塩むすびと取り替えんか、フク」と言ったので「ハイ、ドウゾ、塩ムスビ、オイシソウ」

「井上様ありがとうございます。いただきます。団子、沢山食べて下さい。まだまだありますから。なにせ、フクが大食いなもんで……」と伊助は言いながら、フクを見ると

フクは言われている事にはおかまいなしに、もぐもぐと塩むすびを食べていました。

「うまいか？ フク」

「ハイ、大変オイシイデス、団子ドウゾ」

「うん。うまいなあ。中々腕を上げたではないかフク、伊助、これ売ったらどうだ？」

「井上様、もう売って歩いていますよ。野菜と一緒に。畑仕事があるからあんまり作れないけど、その日作った分は、全部売り切ってます」

「そうか。本当にお前は商魂たくましくなったもんだなあ。初めて会った時は、ただのお人好しの若者なだけだったのに、こんな才能があったとはな」

「みんな、フクのおかげです。『養わなくちゃならない者がいる』ってだけで、気持ちって変わって来るんですよ。何とかしよう。しなければって思えば、何とか考えって浮かんで来るし、フクがいろいろ手伝ってくれるから、ここまで来れたんです。でなきゃ、俺みたいな中途半端な人間、とっくに誰かに騙されたりして、身包み剥がされて、だめになっていますよ」と言って、フクを見ました。

「兄チャンハ、立派デス、優シイシネ」と言って笑いました。

「お前達の兄弟自慢は、いつまでも終わる事がないな。本当に……」

「そういえば……」と伊助はちょっと聞きづらそうに、井上様に言いました。

「あれから、井上様の所は、どうですか。うまくいってますか……」

「うんそれがなあ、今までの何十年は一体何だったのかという位に、二人共仲が良くて

なあ、この間も一緒に出かけて、買物なんかして来てたんだよ。驚いた。一緒にだぞ。今度はわしが一人ぼっちにされているみたいな気にさえなってるなあ、ははは」と笑うと、言葉とは違って

、うれしそうに目を細めました。

「そうですか。それは、何より、一安心ですね」

「今までは、家の中がごたごたしてたから、正直言って、仕事にもあまり身が入らんでなあ。適当というわけではないが、なんとなくこなしていたんだが、家の中が明るいと、なんだかやる気が湧いて来るんだよこれが……、お前と同じでな。ああしてみよう。こうしたらどうだろう。って考えられるようになって来てな、ここの町の話しも以前から聞いてはいたんだが、まあ、自分がやらなくても誰かがやるだろう位の気持ちだったのが、何だか自分の眼で確かめたくなくてな、今日、来たって訳だ」

「そうですか。でも、何とかかなりますかねえ。これが……」

「うーん。そうだな。妙薬が何かは今の所、浮かばんな」そう言うと、井上様は腹一杯になって、ひっくり返っているフクを見て

「そう言えば、フク、うちのがなあ、『フクにやるんだって言って』又、わしの着物を仕立て直してたぞ。そのうち、取りに來い」

「ハイ、アリガトウゴザイマス。着物ピッタリ。ウレシイデス」と言うと、又、ごろんと寝転がりました。

「お前、食い過ぎだつての、そんなに食っちゃって歩けるのか？俺はお前をかたぐるましたりおんぶしたりなんて出来ないからな」と言って笑いました。

「エー。ジャア、井上様ハ？」

「何！わしが知るか！ そんなことしたら腰が抜けるは」と言ってフクから目をそらしました。

三人は、しばらくそうして休んでいました。すると、道の向こうから一人の爺さんが歩いて来るのが見えました。その爺さんは、ゆっくりとでしたが、三人目指して歩いて来るのがわかりました。そして、

「あんたたち、ここの者じゃないだろう？どこから来なされた」と言うと

「ああ、わしらは山の向こうに住む者だ」と井上様が応えました。

「山の向こう？ああそうかい、あっちはどんなだい？栄えて暮らし易いって聞いたけれど……。ワシらの所も昔はそうだったがのう」と、自分の後ろを振り向きながら言いました。

「爺さん、腹減ってないかい？」と、伊助は自分の団子を見せました。爺さんは

「いや……いいのかい？」と言い、少しうれしそうに、けれど自分の息子のような他人から物を貰うのが少し恥ずかしいとでもいうようにしながら、団子を一つ食べました。爺さんはそっと目をつむり

「ああ、なんておいしいんだ。涙が出そうだ。あんたが作ったんかい？」

「いや、弟さ」と隣のフクを指差しました。

「ハイ、フクト申シマス。オイシクテヨカッタデス」とにっこりしました。

「ああ、そうかい、その手で作ったんならうまいはずだねえ。柔らかさ加減が丁度良いよ。」

「爺さん、フク見て驚かないのかい？ 大抵は会う人、腰抜かすんだけど」と伊助が言うと

「何で、腰を抜かさなきゃならないんだい？ きれいに澄んだ目をしているじゃないか。こんな目をしている人に悪い人なんていないさ。それに、あんたの弟なんだろう？ だったら、別に驚く事はないさ。お前さんも良い人だ」



「へえ、爺さんそんな事わかるん」

「伊達に生きてないさ。ふふ」と、爺さんは自慢気に言いました。

「爺サン、オ団子モットドウゾ、元気出ルヨ」とフクに勧められたので

「そうかい、じゃあ、も一つ貰おうかね」と言って食べました。爺さんは、井上様に

「どうですか？ この有様は」と聞くと

「うーん、わしが思っていた以上にひどいな」

「お役人様。もうどうにもこうにもここはなりませんや」と寂しそうに言いました。

「爺さんは、ずっとここで住んでいるのかい？」と井上様が聞くと

「はい、ワシもその前もずっとここで生まれて生活していました。けれど、それも、ワシの代でお終いです。息子達はここを出て行きました」

「爺さん、一人で暮しているのかい？」

「はい」

「うーん。それは寂しいなあ」

「皆、どこに行っちゃったんだい？」

「ここにいてももう暮して行けません。他の町に家族で行きました。ワシも『一緒に』って言われたけど、ワシはここでしか生きられないんですよ。どんなに町が変わり果てた姿になっても。ここには先祖も、ばあさんも眠っておるんでなあ。ワシがいなくなれば、寂しがるだろう？」

ふあっふあっ」と力なく笑いました。

「まあ、爺さんの気持ちはわからんでもないが……、今いる人の事を考えた方が爺さんの為にも良いんじゃないのか？」と井上様は言いました。

「……こんな相談が出来る人がもっと早くここにおったら、ワシも変っていたかも知れませんね」と、又寂しいように俯きました。

「まあ、いろいろ余計な事聞いて済まなかったな。悪かったな」と井上様は話題を変えようとしてしました。

「ところで、爺さんとこの田はどこだい？」と伊助が聞くと

三人の所より少し向こうを指差しました。そこは、稲も黄色に枯れ、土も割れ、真っ直ぐ立っている稲は一つもありませんでした。

三人は、爺さんにかけてやる言葉もなく、ただ爺さんが指差した荒れ果てた田をじっと眺めていました。

「稲、カワイソウ。米、トレナイ」

「そうよなあ」

「なんで、こうなるまで放っておいたんだ！生まれてからここで育ったんなら、わかりそうなのだろうに。爺さんよ」と伊助は言いました。

爺さんは

「欲には勝てんじゃった……。恐ろしいもんじゃのお。人の心というものは、ワシらもあんた達兄弟のように、山を思い、他人を思っておればこんな事には……。今更言っても、どうにもならんがのう」と言いました。

フクはとことこ歩き、爺さんの田まで行って稲を一つ採って来ました。

それを伊助に見せると

「兄チャン、コレダメ？」

「そうだな。これじゃあなあ……」

「田ノ神様、怒ツタ！」

「そうだな、山の神もな」

「皆、怒ツタノ？ ドウシヨウ」と言うと、稲をぎゅっと握りました。

「皆さんよろしければ、家に来ませんか？本当に何もありませんが、久しぶりに人に囲まれて、いろいろ話がしたくなりました。お役人様どうでしょう？」

「うん、そうだなあ。そろそろ日も落ちて来るし。今夜一晩世話になっても良いかな、伊助、フク、どうだ？」

「はい、爺さんお世話になるよ」

「ハイ、オ世話ニナリマス」

三人は、爺さんに連れられて、家まで行きました。

爺さんの家は、藁ぶき屋根で、戸は傾き、ところどころ壁に穴も開いていました。

「へへへ、お恥ずかしい限りです……。どうぞおあがり下さい」と爺さんが言うと

伊助は

「フク、床踏み抜くなよ。気をつけて歩けよ。」と言われたので、フクはそろりそろりと歩きました。井上様は

「どっこらしよ」と腰を降ろすと

（これは馬小屋以下だなあ）と思いました。

伊助も（俺が最初に住んでいた所よりひどいや）と思いました。

「本当にひどい所で……」

「いやいや、爺さん、そんなに気にするな」

「そうだよ、爺さん。一人きりなんだから仕方ないよな。修理もその年じゃおぼつかないだろうし……」

「はい、手が出ません……」

「そうだ！一宿のお礼に明日、修理させてくれないか。よければ……。どうだい、大した事は出来ないが。」と伊助は言いました。

「いや、とんでもないそんな事……」

「いやいや爺さん、やってもらえ、これも何かの縁というものだぞ」と井上様が言うと爺さんは三人に頭を下げました。

「よーし。決まりだ！フク、明日早起きして、出来るだけ沢山この家直すぞ」と言うと

「ウン、兄チャンソウシヨウ、楽シミ」とフクも言いました。

爺さんは

（ああ、この家にこんなに明るい声が響いたのはどれ位ぶりだろう……）と思うと胸が熱くなり、涙が止まりませんでした。

家の修理は早朝から始まりました。

井上様が陣頭指揮を執り、フクが腐った板を剥がし、その寸法に合わせて伊助が新しい板を切り、フクが釘を打つ、そうしてみるみるうちに家は新しくなり、穴のあいた壁などどこにもありませんでした。

「爺さん、出来上がったぞ、これで床を踏み抜く心配などなく、歩けるな」と井上様が自慢気に言いました。爺さんは

「本当にありがとうございます」と三人に向かい手を合わせて拝みました。フクもその真似をし、爺さんに手を合わせました。

「ドウイタシマシテ」と頭を下げて言ったので、一同は大笑いをしました。

全部の修理が終わったので、後片付けをして、井上様は

「しかし、爺さん、この土地の有様じゃ、大雨でも降ったら、ここいらも鉄砲水とかに、やられるかも知れないな」と言いました。

「本当にその通りでございます。自分達でした事ですから、天の裁きは受けるつもりではおりませんが……」

「こればかりはなあ……」と井上様は途方にくれた顔をしました。すると、伊助が

「今日のところはこれで、帰るけど、そのうち、又、来てさ、土手を作ろう。井上様、どうですか？ どうすれば良い水の流れになるか、考えといてくださいよ。」と言うと

「うーん。そうだな、急いで考えるか……。これは早急に工事に取り掛からねばなるまいな。うん。やるか。そうしよう！」と言いました。

爺さんは驚いたような目をして

「こんな、あと何年生きられるかもわからない爺さんの為に、そんな事……。思ってくださいのですか……。何と言う……」と言うと、あとは言葉になりませんでした。すると、井上様が

「何も、爺さんの為に、人助けにと思ってやっているのではないぞ。人はなあ。爺さんや、一人では生きられないんだよ。爺さんも一人になって身に染みてわかるだろ？ だからこうして多少なりとも、縁のあった者からいろんな力をもらって生きて行かなきゃならないんだよ。と言うことをだな。わしもこの二人を見て、教えてもらったんだよ。

ははは」と照れくさそうに笑いました。

「俺達のことですか？」と伊助が尋ねると

「そうさ。お前達には本当に助けてもらったんだよ」

「だったら、うれしいです」と伊助が言うと

「ダッターラ、ウレシイデス」とフクも言いました。井上様は照れくさそうにすると、爺さんの方を向き

「じゃあな、爺さん、又、来るからな。それまで楽しみに待っててくれな」

「爺さん、又、来るからな」

「爺サン。又ネ」と言う、三人は涙でくしゃくしゃの顔をしていつまでも手を振る爺さんに、心を残しながら、帰りました。

(急がねばならんな……)と井上様は思っていました。

それから、何日かは、井上様は伊助達の前に顔を出しませんでした。

一生懸命、どうすれば爺さんの町が水に流されないように出来るのかを考えていたのです。

伊助達が井上様の事が気にかかりだしていた、ある日、井上様が久し振りで顔を出しました。

「おお、久し振りだなあ。伊助、フク、元気だったか？」

「はい、井上様もしばらく顔を見せなかったから、『どうしてんのかな？』ってフクと  
言ってたんですよ」

「うん。あれからずっと、良い方法はないもんかと考えてたんだよ。でな、概要の図面が出来て、役所の許可も取れたんでな、工事に入ろうかと思って、お前達にも手伝って欲しくて、相談に来たという訳だ」と言いました。

「出来たんですか！ そりゃ良かった。早く工事をして、爺さんたち町の人たちを安心させて喜ばせてやりましょうよ」

「早くシヨウ、爺サン待ッテルヨ」

「うんうん。では、早速、これを見てくれ」と言って、井上様は図面を広げて伊助達に説明しました。

「ここを掘って、高くするだろう？すると、ここに水が溜まるんだが、田の両端に水が流れて行く側溝をこう作ってだな……」というものでした。

「この考えだと、爺さんの田も続けられますね。こりゃいいや」

「だろう？ 近いうちに現地に行って爺さんにも打ち合わせをしようと思ってるんだが」

「俺達はいつでも構いませんよ」

「ああそうか。済まん。では、早速、明日、いや！明日は用があつたか。明後日とするか。な、フク」

「ハイ、フク、団子持ッテ行ク」

「そうだな、腹ごしらえは十分にせねばな」

「ハイ、沢山作りマス」むふふと笑いました。

そうして、打ち合わせも終わり、井上様も帰りました。

その日の夜の事でした。いつもは耳を塞がないでも耳に入ってくるフクの鼾が、聞こえないのに伊助は気がつきました。そして、目を覚ましてフクを見ると、その姿がありませんでした。

「うん？ フク？」と辺りを見廻しましたがフクの姿はありませんでした。

「便所かなあ」と言い、耳を立ててみましたが、何も聞こえませんでした。

伊助は胸騒ぎがするのを覚えました。そして、そっと表を見に行きました。すると、そこには、月光を浴びているフクの姿がありました。

フクは胡坐をかいて、両肩は下がり、うなだれていて、後ろから見ても泣いているように見えました。伊助の心臓はドクンと鳴りました。

（フクが帰ってしまう……）その、核心に似た思いを否定するように、くるっと背を向けて自分の布団に戻り、頭まですっぽりと布団にもぐり、（今のは、夢だ！夢だ！フクがいなくなるはずがない！）と念仏のように唱える様に自分の頭に言い聞かせました。そして、フクが表から戻り、そっと布団に入っても伊助は、知らんふりをしていましたが、朝まで眠ることは出来ませんでした。

フクを照らしていた、一筋の月光は、フクの星のもので、フクの体にぐるぐると巻きつき、フク

の体は黄金に輝いていました。その光りが『そろそろ、戻りなさい。もう、気も済んだでしょう？』

「フク、帰りタクナイ！」

『……ずっと、ここで暮すつもりですか？ 出来ますか？ あなたは何十年たってもその姿で変わらないけれど、伊助さん達、人間は、皆年を取って。いなくなってしまうのですよ……それでも、残るのですか？ 良いのですか？』

「デモ、兄チャント一緒ニ居タイ……」

『……困りましたね。あなたがここで、どれほど楽しかったかは、私達もわかっています。皆と離れたくないというのわかります……。では……。伊助さんも連れて来られますか？

あなたにあれ程心を合わせようとしている人ならば、私達の所でも暮せるかもしれません……。言えますか……』

「兄チャンニ、聞イテミマス。一緒ニ、才願イシマス」と言う

『わかりました。では……。あなた達が来る事を待っていますよ』と言うと、フクに巻き付いていた月光は、ゆっくりとほどけ、空高く、上へと去って行きました。

フクは（兄チャン、一緒ニ来テクレルカナア……）と、思いました。

楽しい今の暮らしから、去らなければならないという寂しさと、伊助に言ってわかってもらえるだろうかという不安で、フクの胸は一杯で、ぬぐってもぬぐっても涙が出て来ました。布団に入ろうとして、寝ている伊助を見て

「兄チャン？」と一言、声をかけて布団に入り、伊助が動かないのを確認すると、フクも一睡も出来ずに朝を迎えてしまいました。

次の朝、フクは何も無かったかのように、元気に伊助に

「兄チャン、オハヨウ。」と声をかけました。

「あっ、ああ。おはよう。眠れたか？ フク」と聞くと

「ウン？ ウン。」と応え

「そうか、あのな？フクさあ……」と言いかけてましたが、フクから返ってくる言葉が恐ろしかったので、それ以上は聞く事が出来ませんでした。

「いや、いいんだ。後で明日持って行く物の用意しような」と言いました。

「ウン。ソウダネ、ソウシヨウ」と言うフクの明るい表情に、伊助は（やっぱり、俺が見たのは夢だったのかもしれないな）と思いました。

しかし、フクは

（兄チャン、気ガツイテル、ドウシヨウ）と思っていました。

二人は、いつものように仲良く畑仕事をして、明日持って行く団子の準備をしました。

「兄チャン、工事ガ上手ク行ケバ、爺サン喜ブネ」

「そりゃあそうさ、息子さん達もきつと戻って来てくれるさ。だけど、一日や二日で終わる工事じゃないからなあ。爺さの所に世話になりながらやらないとなあ」

「ウン、ワカッタ、時間カカルネ」と言い、フクは少し遠くを見るような表情をしました。

「うん？ どうした。フク？」

「ナンデモナイ、フク、ガンバルヨ」

「おお。そうだな。がんばろうな」と伊助も言いましたが、  
(やっぱり、夢じゃなかった……)と伊助は確信すると、次の言葉がのどに引っ掛かってうまくしゃべれませんでした。

(フクに気付かれぬように、明るく。一日でも長く一緒にいられるように……)

フクも(兄チャントズット一緒にイラレマスヨウニ……)とっていました。

一つ一つの団子に心の限りを込めて作りました。

フクはどっさり団子を作り終えると、

「出来タヨ」と言い伊助に見せました。

伊助は、

「これ、多すぎないか？こんなに食べられないだろう？」と言いました。

フクは

「大丈夫！ 井上様ト爺サンノ分モ、アルンダ。」とニコニコして言いました。

伊助も

「そうだな、皆に食べてもらえばいいな」と言い、フクと顔を見合わせました。

しばらくして、井上様がやって来ました。

「おうい、用意は出来てるか？」

「はい、出来ています。行きますか？」

「行コウ」

三人は、爺さんが待つ、向こう町へと歩き出しました。

「せっかく、出発したのに、何やら、雲行きが怪しい事だなあ」

「これは一雨、来るかも知れませんねえ」

「アメ、フル。爺サン困ルカナ？」

「うーん、大雨になったら、あの地盤じゃ持ち応えられそうにあるまいな。工事が始まる前に鉄砲水でも起こったら、皆流されてしまうぞ」

「井上様、向こうに着いたら、少し空の様子を見た方が良くも知れませんね。」

「うむ、そうだな、これは時間が掛かるかも知れんな」

「時間、掛カル？」

「うん、そうだ」

「フク、ガンバルヨ」

「フク、早く終わらせたいのか？」と伊助が聞くと、フクは、歩くのを止めて

「ウン、早く終ワレバ爺サン喜ブヨ。ソノ方ガ兄チャモウレシクナイノ？」と伊助を見ました。

伊助は工事が終わると(フクがいなくなってしまう)と思っていたので、ハツとして

「あっ、そうだな。早く終わらせて爺さんを喜ばせような」と言いました。

「おい、日のあるうちに着こうや。」と井上様にせかされたので、二人はそれ以上の話を止めて、黙って歩きました。

何回かの休息を取りながら、空模様を見ながら爺さんの町の入り口に到着しました。

そのまま、三人は爺さんの家に行きました。

「爺さん。来たぞ」と井上様が戸を開けながら言うと、爺さんは

「お待ちしておりました。生きて又お目にかかれて本当にうれしいです」と応えました。井上様は

「又、何を縁起でもない事を言っておるのだ。さあ、爺さん、早速だが工事の打ち合わせをした

いから、町の人を集めてくれないか」

「はい。いつでも取り掛かれるように、声は掛けております。すぐに呼んで参ります」と言い、家を出て行きました。

フクは、持って来た団子の包みを開き、爺さん以外の町の人に食べさせようと、うれしそうに並べました」

伊助と井上様は、図面を見ながら、工事の段取りを話していました。

そこに、爺さんが戻って来て

「井上様。町にいる者を連れて参りました」と言ったので、井上様が「よし」と外に出て見ると。若者は一人もおらず、殆ど初老の男性でした。

「おいおい、これだけか？ 十人ちょっとじゃないか」

「はい、若い者は、皆出て行ってしまっておりますので、残っているのは、年寄りがほとんどです」と寂し気に言いました。

「ああ、まあ、一人もないよりは良いかも知れんが……」

(手間がかかりそうだな) と思っていました。

すると、伊助が「井上様、俺達がんばりますから、フクも百人力だし、な、フク」と振り向くと

「ソウ、ガンバルヨ、百人力」と、腕を上げて大きな力こぶを見せました。

「まあ、それしか、あるまいな。では、皆に説明するぞ。わしの周りに集まって来れ」と言い、車座になって、図面と土地を見比べながら、わかり易く一生懸命説明しました。

集まった人達は、井上様の説明もさることながら、井上様の側に立って、にこにこしているフクの大きさに目を奪われていました。

井上様は、一つの手順を説明する度に、

「どうだ？ わかったか？」と聞いて確認しました。

「へ？ はい……」などと、生返事をする人を見つけると、フクが

「本当ニ、分カッタノ？ シツカリ聞イテネ！」とその人の真正面に立って、見下ろして、少し脅かしました。

それをやられた何人かは

「うわわわ。わかりました。ちゃんと聞きます。ごめんなさい」と言って、真剣に聞きました。

漸く、説明が終わったところで、フクが持って来た団子を差し出しました。

「ドウゾ、食ベテ下サイ。オイシイヨ」とさっき、脅かした人たちにも笑顔で団子を分けました

。

団子を貰った人たちは、その大きさに目を見張り

「これ、あんたが作ったのかい？」とフクに聞きました。

フクは「ソウダヨ」とうれしそうに応えました。

すると、爺さんが

「フクさんお得意の団子なんだ。ワシも食べたが、そりやうまかったぞ。ほら、食ってみろ」と、まだ匂いを嗅いだり、手に乗せたりして団子を眺めている人に勧めました。

そして、恐る恐る口に入れると

「あれ。本当だ！うまいうまい」と言う人あり「何か、ここんところがほっとする味だな」と胸をさする人もありました。

「大したもんだ」と感心する人ありで、すっかりフクに馴染んでいました。伊助は「フク！良かったな。こんなにほめてもらって。」と言うと、フクは「ウン。ウレシイ！一生懸命作ッタンダ」と自慢気に言いました。井上様は「なんだ、なんだ？ フクの団子の方が、わしの話しの時より皆の眼の輝き、良いのではないか？ え？」と冗談めかして言ったので、一同は大笑いしました。

「そんな事はありませんよ。井上様のお話はとてもよくわかりました。自分の町でもないのに、こんなにお心を砕いていただいて、本当にありがたく思っております」と、誰かが言いました。井上様は「工事がうまく行って、又、田が出来たら、この団子の作り方をフクから教わって、その材料を作っただ、それを売ってこの町の名物にすればよかろう」と言う町の人たちは「おおーっ」と声をあげ「是非そうしよう！」

「じゃあ、早く工事に取り掛かって……。いろいろやる事あるなあ。忙しくなるぞ……」と、うれしそうに口々に言いました。

「フクさん、まだ先の事かも知れませんが、是非作り方を我々に教えて下さい。覚えて、必ず作りますから。お願いします」と何人かは頭を下げたので、フクは

「ワカッタ。デモ、兄チャン？ フク、材料ノ名前ワカラナイヨ」と伊助を見たので「ああ。必要な材料は俺が言うよ。フクは作り方、手順とかコネ方とかを教えてやんな」と言ったので

「ウン。ワカッタ。今チョットダケ言ウヨ、皆コッチニ来テクダサイ」と何人かを集めて、大きな手振り身振りで、説明し始めました。それを見た井上様は

「なんだ？ もう始まったのか？ 思わぬ副産物があったようだなあ。え？ 大掛かりな田の事なら、もう爺さんたちには無理かも知れんが、団子作る位の畑なら、何とかなるだろう。それで、団子が売れてくれれば、これは万々歳だ。町も活気付くかもしれんしな」と言いました。爺さんは

「本当に井上様や伊助さんフクさんには、何から何まで……」と頭を下げたまま、中々上げようとしませんでした。伊助は

「爺さん。もういって」と爺さんの体を起こしました。

「それでもって、息子さん達も戻って来てくれれば、もっといいよなあ」と言いました。

「良い評判というのも、広まるのは意外に早いものだぞ、そうなればきっと息子達も帰って来るさ。な。だから、それまで、暗い事は考えないで、しっかり生きるんだぞ。爺さん。良いな」と井上様は、爺さんに念を押ししました。爺さんは又涙をポロポロと流し

「お三人様に出会ってから、すっかり涙もろくなってしまいましたが、でも少し、気力が湧いて来たような気がしております。前はもう何もかもをあきらめていたので、涙も出ませんでしたから……」と頭を掻きながら、照れ隠しに笑って見せました。

井上様は、優しく爺さんの背中に手を添えて、うんうんと頷いていました。

フクの団子の説明は、話す方も聞く方も、読み書きが出来なかったので、大変そうでしたが、皆

、自分の生活が掛かる事になるかも知れない事だと思ったので、必死に覚えています。

「ワカッタ？」とフクが聞くと

「そんなに難しくないな。要するにこねる時の力加減だな」といろいろ感想を言い合いました。

そして、町の人達は、いくつか分けてもらった団子を持って、教えてもらった作り方を復唱しながら、家に戻りました。

井上様は、その後ろ姿に、

「明日から頼むぞ」と声を掛けると、皆一斉に振り返って、深くお辞儀をしました。

「井上様。もうお入り下さい。今日は早く休む事に致しましょう」

「うん。そうだな」と中に入り、伊助の畑の野菜と井上様が持って来た魚とで、爺さんが鍋を作り、四人はおいしく食べました。

四人は、それぞれの思いを抱いたまま、布団に入り、天井を見つめていましたが、早々に寝息をたてる井上様と爺さんでしたが、伊助とフクはなかなか寝付けませんでした。

何度も寝返りを打っているフクに

「フク。眠れないのか？」と聞くと

「ウン……。兄チャンモ？」

「うん。まあな。お前も今日は忙しかったから、疲れただろうに。大活躍だったもんな。

皆喜んでたし……。ゆっくり呼吸してみろ。眠くなれるぞ」

「ウン。ワカッタ、ヤッテミル。兄チャンモシテネ」と言いました。

何度かそうしているうちにフクの静かな寝息が聞こえて来ました。

伊助は、フクの布団をかけ直してやり、起きないようにそっと、頭を撫でてやりました。そして、

「いつまでも、一緒に……。な……。」と小さな声で静かに言いました。

次の日の朝は晴天で、工事をはじめるとはうってつけの日となっていました。

外で、井上様が顔を洗い、首の手ぬぐいで顔を拭きながら、先に外にいて顔を拭いていたフクに

「良い天気になったなあ。眠れたか？」と聞きました。

「ハイ。井上様ハ？」と聞くと

「わしか。それがな、無事に工事が終わってな、皆で酒を飲んでな、ワシがフクにかたぐるまされて、フクが踊っている。っていう夢を見たぞ。楽しい夢だったなあ」と思い出しながら言いました。フクは

「無事ニ工事が終ワレバ、出来ルヨ。かたぐるま」と言い、自分の肩を叩きました。

井上様はフクを見上げ、顔の前で手を振り

「いやいや、遠慮しとくぞ、そんな高い所、恐ろしいわ。ははは」と笑いながら家に入ってきました。

中では伊助が「フク！ 飯だぞ！」とフクを呼び「ハイと返事をして、フクも中に入りました

。

工事は、井上様の説明が良かったのか、雨でも風でも続けたせいか、又、フクの百人力のせいか、段取りよく進み、それぞれの工程を着々となして行きました。

そして、終了予定をだいぶ残して工事は無事終わりました。

井上様はその出来具合を眺めながら、

「いやはや、良い出来具合だ。えーっと？あそこから土砂が来ても、こっちを流ってこう流れて、向こうに行くから……。ここの町は安泰という訳だ。ふんふん」とあちこちを指差しながら確認していました。伊助とフクも

「すごい溝だなあ。でもこれ位なら安心だな。爺さん、良かったなあ」と爺さんに声を掛けました。

爺さんは、目を細めにここにこして、頷きました。けれど、フクだけが小首をかしげて、山の方を見ていました。

「フク？ どうした？」

「兄チャン。聞コエル……」

「何がだ？」

「山、唸ッテル」

「山が唸ってるって？別に何も聞こえないけど……」と言って山を見ましたが

少し離れた所で溝を見ていた井上様に

「井上様あー。山から何か聞こえますかあ？」と大きな声で聞きました。

「はあ？ 山から音？そんなもん聞こえん。」井上様は背丈近くある溝の中に入ってしまい、土の固まり具合や深さを測っていました。

(フクに気付かれぬように、明るく。一日でも長く一緒にいられるように……)

フクも(兄チャントズット一緒にイラレマスヨウニ……)とっていました。

一つ一つの団子に心の限りを込めて作りました。

フクはどっさり団子を作り終えると、

「出来タヨ」と言い伊助に見せました。

伊助は、

「これ、多すぎないか？こんなに食べられないだろう？」と言いました。

フクは

「大丈夫！ 井上様ト爺サンノ分モ、アルンダ。」とニコニコして言いました。

伊助も

「そうだな、皆に食べてもらえばいいな」と言い、フクと顔を見合わせました。

しばらくして、井上様がやって来ました。

「おうい、用意は出来てるか？」

「はい、出来ています。行きますか？」

「行コウ」

三人は、爺さんが待つ、向こう町へと歩き出しました。

「せっかく、出発したのに、何やら、雲行きが怪しい事だなあ」

「これは一雨、来るかも知れませんねえ」

「アメ、フル。爺サン困ルカナ？」

「うーん、大雨になったら、あの地盤じゃ持ち応えられそうにあるまいな。工事が始まる前に鉄砲水でも起こったら、皆流されてしまうぞ」

「井上様、向こうに着いたら、少し空の様子を見た方が良くかも知れませんね。」

「うむ、そうだな、これは時間が掛かるかも知れんな」

「時間、掛カル？」

「うん、そうだ」

「フク、ガンバルヨ」

「フク、早く終わらせたいのか？」と伊助が聞くと、フクは、歩くのを止めて

「ウン、早く終ワレバ爺サン喜ブヨ。ソノ方ガ兄チャモウレシクナイノ？」と伊助を見ました。

伊助は工事が終わると(フクがいなくなってしまう)と思っていたので、ハツとして

「あっ、そうだな。早く終わらせて爺さんを喜ばせような」と言いました。

「おい、日のあるうちに着こうや。」と井上様にせかされたので、二人はそれ以上の話を止めて、黙って歩きました。

何回かの休息を取りながら、空模様を見ながら爺さんの町の入り口に到着しました。

そのまま、三人は爺さんの家に行きました。

「爺さん。来たぞ」と井上様が戸を開けながら言うと、爺さんは

「お待ちしておりました。生きて又お目にかかれて本当にうれしいです」と応えました。井上様は

「又、何を縁起でもない事を言っておるのだ。さあ、爺さん、早速だが工事の打ち合わせをした

いから、町の人を集めてくれないか」

「はい。いつでも取り掛かれるように、声は掛けております。すぐに呼んで参ります」と言い、家を出て行きました。

フクは、持って来た団子の包みを開き、爺さん以外の町の人に食べさせようと、うれしそうに並べました」

伊助と井上様は、図面を見ながら、工事の段取りを話していました。

そこに、爺さんが戻って来て

「井上様。町にいる者を連れて参りました」と言ったので、井上様が「よし」と外に出て見ると。若者は一人もおらず、殆ど初老の男性でした。

「おいおい、これだけか？ 十人ちょっとじゃないか」

「はい、若い者は、皆出て行ってしまっておりますので、残っているのは、年寄りがほとんどです」と寂し気に言いました。

「ああ、まあ、一人もないよりは良いかも知れんが……」

(手間がかかりそうだな) と思っていました。

すると、伊助が「井上様、俺達がんばりますから、フクも百人力だし、な、フク」と振り向くと

「ソウ、ガンバルヨ、百人力」と、腕を上げて大きな力こぶを見せました。

「まあ、それしか、あるまいな。では、皆に説明するぞ。わしの周りに集まって来れ」と言い、車座になって、図面と土地を見比べながら、わかり易く一生懸命説明しました。

集まった人達は、井上様の説明もさることながら、井上様の側に立って、にこにこしているフクの大きさに目を奪われていました。

井上様は、一つの手順を説明する度に、

「どうだ？ わかったか？」と聞いて確認しました。

「へ？ はい……」などと、生返事をする人を見つけると、フクが

「本当ニ、分カッタノ？ シツカリ聞イテネ！」とその人の真正面に立って、見下ろして、少し脅かしました。

それをやられた何人かは

「うわわわ。わかりました。ちゃんと聞きます。ごめんなさい」と言って、真剣に聞きました。

漸く、説明が終わったところで、フクが持って来た団子を差し出しました。

「ドウゾ、食ベテ下サイ。オイシイヨ」とさっき、脅かした人たちにも笑顔で団子を分けました

。

団子を貰った人たちは、その大きさに目を見張り

「これ、あんたが作ったのかい？」とフクに聞きました。

フクは「ソウダヨ」とうれしそうに応えました。

すると、爺さんが

「フクさんお得意の団子なんだ。ワシも食べたが、そりやうまかったぞ。ほら、食ってみろ」と、まだ匂いを嗅いだり、手に乗せたりして団子を眺めている人に勧めました。

そして、恐る恐る口に入れると

「あれ。本当だ！うまいうまい」と言う人あり「何か、ここんところがほっとする味だな」と胸をさする人もありました。

「大したもんだ」と感心する人ありで、すっかりフクに馴染んでいました。伊助は「フク！良かったな。こんなにほめてもらって。」と言うと、フクは「ウン。ウレシイ！一生懸命作ッタンダ」と自慢気に言いました。井上様は「なんだ、なんだ？ フクの団子の方が、わしの話しの時より皆の眼の輝き、良いのではないか？ え？」と冗談めかして言ったので、一同は大笑いしました。

「そんな事はありませんよ。井上様のお話はとてもよくわかりました。自分の町でもないのに、こんなにお心を砕いていただいて、本当にありがたく思っております」と、誰かが言いました。井上様は「工事がうまく行って、又、田が出来たら、この団子の作り方をフクから教わって、その材料を作っただ、それを売ってこの町の名物にすればよかろう」と言うのと町の人たちは「おおーっ」と声をあげ「是非そうしよう！」

「じゃあ、早く工事に取り掛かって……。いろいろやる事あるなあ。忙しくなるぞ……」と、うれしそうに口々に言いました。

「フクさん、まだ先の事かも知れませんが、是非作り方を我々に教えて下さい。覚えて、必ず作りますから。お願いします」と何人かは頭を下げたので、フクは

「ワカッタ。デモ、兄チャン？ フク、材料ノ名前ワカラナイヨ」と伊助を見たので「ああ。必要な材料は俺が言うよ。フクは作り方、手順とかコネ方とかを教えてやんな」と言ったので

「ウン。ワカッタ。今チョットダケ言ウヨ、皆コッチニ来テクダサイ」と何人かを集めて、大きな手振り身振りで、説明し始めました。それを見た井上様は

「なんだ？ もう始まったのか？ 思わぬ副産物があったようだなあ。え？ 大掛かりな田の事なら、もう爺さんたちには無理かも知れんが、団子作る位の畑なら、何とかなるだろう。それで、団子が売れてくれれば、これは万々歳だ。町も活気付くかもしれんしな」と言いました。爺さんは

「本当に井上様や伊助さんフクさんには、何から何まで……」と頭を下げたまま、中々上げようとしませんでした。伊助は

「爺さん。もういって」と爺さんの体を起こしました。

「それでもって、息子さん達も戻って来てくれれば、もっといいよなあ」と言いました。

「良い評判というのも、広まるのは意外に早いものだぞ、そうなればきっと息子達も帰って来るさ。な。だから、それまで、暗い事は考えないで、しっかり生きるんだぞ。爺さん。良いな」と井上様は、爺さんに念を押ししました。爺さんは又涙をポロポロと流し

「お三人様に出会ってから、すっかり涙もろくなってしまいましたが、でも少し、気力が湧いて来たような気がしております。前はもう何もかもをあきらめていたので、涙も出ませんでしたから……」と頭を掻きながら、照れ隠しに笑って見せました。

井上様は、優しく爺さんの背中に手を添えて、うんうんと頷いていました。

フクの団子の説明は、話す方も聞く方も、読み書きが出来なかったので、大変そうでしたが、皆

、自分の生活が掛かる事になるかも知れない事だと思ったので、必死に覚えています。

「ワカッタ？」とフクが聞くと

「そんなに難しくないな。要するにこねる時の力加減だな」といろいろ感想を言い合いました。

そして、町の人達は、いくつか分けてもらった団子を持って、教えてもらった作り方を復唱しながら、家に戻りました。

井上様は、その後ろ姿に、

「明日から頼むぞ」と声を掛けると、皆一斉に振り返って、深くお辞儀をしました。

「井上様。もうお入り下さい。今日は早く休む事に致しましょう」

「うん。そうだな」と中に入り、伊助の畑の野菜と井上様が持って来た魚とで、爺さんが鍋を作り、四人はおいしく食べました。

四人は、それぞれの思いを抱いたまま、布団に入り、天井を見つめていましたが、早々に寝息をたてる井上様と爺さんでしたが、伊助とフクはなかなか寝付けませんでした。

何度も寝返りを打っているフクに

「フク。眠れないのか？」と聞くと

「ウン……。兄チャンモ？」

「うん。まあな。お前も今日は忙しかったから、疲れただろうに。大活躍だったもんな。

皆喜んでたし……。ゆっくり呼吸してみろ。眠くなれるぞ」

「ウン。ワカッタ、ヤッテミル。兄チャンモシテネ」と言いました。

何度かそうしているうちにフクの静かな寝息が聞こえて来ました。

伊助は、フクの布団をかけ直してやり、起きないようにそっと、頭を撫でてやりました。そして、

「いつまでも、一緒に……。な……。」と小さな声で静かに言いました。

次の日の朝は晴天で、工事をはじめるとはうってつけの日となっていました。

外で、井上様が顔を洗い、首の手ぬぐいで顔を拭きながら、先に外にいて顔を拭いていたフクに

「良い天気になったなあ。眠れたか？」と聞きました。

「ハイ。井上様ハ？」と聞くと

「わしか。それがな、無事に工事が終わってな、皆で酒を飲んでてなあ、ワシがフクにかたぐるまされて、フクが踊っている。っていう夢を見たぞ。楽しい夢だったなあ」と思い出しながら言いました。フクは

「無事ニ工事が終ワレバ、出来ルヨ。かたぐるま」と言い、自分の肩を叩きました。

井上様はフクを見上げ、顔の前で手を振り

「いやいや、遠慮しとくぞ、そんな高い所、恐ろしいわ。ははは」と笑いながら家に入って行きました。

すると、フクの勘が当たったのか、遠くでいきなり山鳴りが聞こえ始めました。その音は、だんだんと大きく、強くなり側溝にいる井上様以外を除いて、全員が聞こえる程になって来ました。伊助が大声で

「井上様！ 早くそこから出て！危ない！」と叫ぶと

「はあ？ 何？ 危ないって？どこが……」と漸く側溝から顔をぬっと出しました。

爺さんが

「土砂が来るかも知れません！早く出てください！」と言うと

「おお、そうか、では出るとするか」と勢いをつけてそこから跳び出そうとしました。

そして、両腕を踏ん張り、淵に片足をかけた途端、土砂が地をはう竜巻のように側溝に流れて来ました。

そして、その土砂は、あと少しで這い上がる事のできた井上様の右足に土砂が当たると、井上様は体勢を崩し、その中に落ちてしまいました。

フクと伊助が助け出そうとそこに向って、走りましたが間に合いませんでした。

井上様の「わああ。助けてくれえ……」と言う声と、浮いたり沈んだりする体は、あつという間の出来事でした。

「井上様！」と全員が叫ぶと同時にフクはざんぶと土砂の中に飛び込みました。

「フク！」と伊助はフクの体が、流されて行くのを見ながら、流れの方に走りました。

フクの体もあつという間に土砂の中に見えなくなりました。

土砂はこれで、気が済んだとばかりに流れが収まりました。伊助は呆然と立ちすくみ

「何だ……、何でだ……」とがくつと膝を付き、うな垂れました。すると、爺さんが

「伊助さんしっかりしなされ。ほれ」と長い棒を手渡し「これで、探しに行こう、さあ、皆も行くぞ」と爺さんが指揮を執り伊助を抱えて立ち上がらせました

「井上様あー」「フクさん！」「おーい」と町の人が土砂の引いた溝の中に入り、棒で突きながら二人を捜し回りました。

二人はどこまで流されて行ったのか、さっぱり見つける事が出来ませんでした。

「もう……だめだ……」と伊助が泣き出すと

「あきらめたら、そこで何もかも終わりでぞ。伊助さん。この先一步に期待を込めて、さあ、もっと捜しましょう。と腕を取り皆で二人の名前を呼び続けました。

誰もが、本当にあきらめかけた時、溝のずっと先から声が聞こえて来ました。

「おーい、おーい、伊助えー、爺さん」

「えっ？ 井上様の声？」

「おお、井上様だ」すると、誰かも言いました。

「あれ、フクさんじゃないか？ フクさんが井上様をかたぐるましてこっちに歩いてくるぞ。」

「おーい。こっちだぞお」

一同は歓声を上げながら、のしのしと井上様をかたぐるまして歩いて来るフクの所まで、全力で走りました。伊助は涙で声にならず、誰よりも早くフクの所に着くと、ただ、フクに抱きつきました。そして、わんわん泣きました。

ふとフクを見上げると、体もさることながら、その顔は泥まみれで、眼も口も開けられず、固く

つぶっていました。

「フク！ ああ、なんて顔だ、眼か？ 痛いかな？ さあ、来っちだ！ 歩けるか？」とその手を引っ張りました。

「兄ちゃん？ 助かったよ。モウ大丈夫」

井上様も眼は開けられませんでした。フクの頭にしっかりとつかまり「いやあ、びっくりした。死んだとおもったぞ。あつと言う今にどんどん流されて、どんなに手足をばたつかせても止まりやしない。体もばらばらになりかけるほど痛くて、でもうだめかとあきらめかけた時にかしんと足首をつかまれてな……フクに、フクの長い手で溝の淵につかまってくれて、何とか命拾いしたわ。フク、迷惑かけて済まなんだな。眼痛いかな？ 大丈夫か」とフクの頭を手探りでなでました。

フクは、構わず、のしのしと伊助に手を引かれ爺さんの家まで歩きました。

伊助と爺さん、町の人々は涙を流しながら家中、町中にある顔や体を拭える物を掻き集め、風呂を沸かし、二人を労いました。

伊助は「フク、井上様が上ったから、風呂に入らせてもらえ」とフクを呼びました。

「ハイ、デモ、フク、スゴク汚レテルケド」と遠慮がちに言いました。すると、爺さんが「こんな狭い風呂で良ければ、どうぞ使って下され」と言ってくれました。

伊助は軽く頭を下げ、眼が痛かったフクは伊助に手を引かれながら、風呂に入りました。

「フク、顔をきれいに洗うんだぞ。水に顔をつけて、眼をばちばちするんだ。こんな風に……」とやって見せました。

「デモ、フク水ニ顔ツケルノマダ少シ怖イヨ」と言うと、

「大丈夫だ、今度こそ俺が側にいるから。何かあったら俺が助けるから。呼べ。すぐ行く。大丈夫だ」と言ってフクの背中をさすり安心させました。フクも

「ウン。ワカッタ。キレイニスル」と言って風呂へと入って行きました。

泥を落として、すっかりきれいになった井上様は、「いやー、本当に皆には迷惑かけて申し訳ない」と皆に頭を下げました。

「いえいえ、ご無事で何よりでした。お怪我はありませんか？」と爺さんが聞くと

「なあに、体中がぎしぎししているが、土砂のせいかな、年のせいかなはわからん位だ。

ははは、生きてこうしていられば、何も言う事はないさ、フクのおかげよなあ。ところで、伊助、フクに怪我はないか？」と聞くと

「眼が痛いって、言ってますけど、丈夫な奴ですから、きれいに洗えば済むかと思ってるんですけど」と言いました。

「そうか、眼と鼻はわしも痛いな。明日ここを発ったら、まっすぐわしの家に来い。確か、何かしら薬があるはずだ、うん、確か見た……」と言ってくれました。伊助は

「はい。それは助かります。俺の所には、薬なんてないから……ありがとうございます」と照れながら言いました。井上様は

「ああ、そうだ、鼻の穴も泥だらけだったんだ。よっころしよつと」と言って立ち上がると、外にある風呂場に行き「フク！ 鼻の穴もきれいにするんだぞ、ああそうだ、耳も泥だらけだぞ」と

フクに声を掛けました。

「ハイ、鼻キレイニスル。耳モネ、ワカリマシタ」と言う声と、ぼしゃぼしゃ洗っている音が聞こえて来ました。それを聞いた井上様は満足そうに伊助達の所へ戻りました。

そして、「しかし、見事な側溝だったな。一粒の土砂も町に来なんだ。」と得意気に言うと爺さんが「はい。あれだけの土砂が流れても何の被害もありませんでした。何せ、あのフクさんがゴロゴロ流れても壊れないのですから」

「うんうん」と町の人も頷きました。

「伊助、心配かけたなあ。済まん。」と井上様は言う。「もういいじゃありませんか。二人共無事だったのですから」

「うん。だが、大事な弟にわしの不注意で怪我させるところだったしなあ。」と言いました。そう言った所にフクが真っ赤な顔をして風呂から上って来ました。

「イイ湯デシタ。爺サン、アリガトウゴザイマシタ」と礼を言うと

「おお、すっかり元のフクさんに戻られて、良かった良かった」とフクの体をさすりました。伊助は

「ああ、やっぱり少し、眼赤いな。痛いか？ あっ、こら！こするんじゃない。」と言うと

「大丈夫、大シタ事ナイヨ。兄チャン」と言いました。

町の人一人が

「さあ、皆さん、お二人も無事に戻られたし、工事も無事に終わったし、大した物は作れませなんだが、どうぞ食べて下さい」と言ってあれこれ三人の前に並べてくれました。フクは

「ウン、才腹空イテタ。イタダキマス」と言って、相変わらずの食欲でむしゃむしゃと食べ始めました。井上様も

「これは何だ？ 川魚か？ どれ、食べて見るか。おお、中々の味だ、うんうん。」とおいしそうに食べました。

三人が明日には発つという事で、爺さんの家は宴は夜遅くまで、にぎやかさが続きました。そのうち、一人二人と町の人には家に帰り、四人だけになりました。すると、爺さんは三人に向かって「本当に皆さんにはお世話になりました。このご恩は一生忘れません。もし、この爺さんが旅立っても、息子達同様、皆様を遠く向こうから、お守り致します」と正座して言いました。井上様は「おいおい、守るのは息子達だけで良いぞ。あはは、まあ、冗談はさておいてだな。爺さん、長生きしろよ。ここは榮えるぞ、又、良い町になるぞ。年だと年だと言ってばかりおらんで爺さんが陣頭指揮でも取ってだな、がんばれ」と言い爺さんの肩をぽんと叩きました。

爺さんはキツと前を向き

「はい、わしもよくよく考えまして、この年寄りで何か役に立てるのであれば、そうしようと思っている所です。やりますぞ。井上様、伊助さん、フクさん」と言いました。

伊助は「ああ、楽しみにしてるよ。爺さん」と言いましたが心の中では、(又、来るよとは言えないよな)とっていました。すると、横にいたフクが「爺さん、兄チャン達ト、又来ルカラネ」と元気に言ったので、伊助ははっとしてフクの顔を見ました。フクは

「ウン？ ネ？ 兄チャン。ソウダヨネ」と首をかしげて、伊助の顔を怪訝そうな顔で見ました。伊助も

「ああ、そうだな、そうしような」と言ってフクから目をそらしました。

井上様が二人を見て、「何、二人でひそひそ話しをしているのだ。そろそろ寝るぞ。ほあーっ、眠い」と大欠伸をしながら布団に入りました。爺さんも「そうしましょう。片付けはこの位であとは明日、やりますから。伊助さんも心配し過ぎてお疲れでしょう。フクさんもお休みなされ」と言い、爺さんと町の人が用意してくれた布団に入りました。伊助も体はへとへとに疲れていましたが、頭は冴えていて、いつまでも眠る事が出来ませんでした。

とうとう朝を迎え、爺さんが起き、井上様とフクが、まだ眠っていました。

やがて、起きだして来たフクは「兄チャン、オハヨウ。爺サン、オハヨウ」と言うとおう、起きたか。どうだ眼は？ 見せてみろ。ああ、やっぱり赤いな。痛くないか？」と見てやると

「少シネ、デモ大丈夫サ」と胸を張ったので

「そうか、井上様とここで、薬つけてもらえば良くなるさ」と言ってやりました。

三人は、朝食を終えると帰り支度をして、爺さんと別れの挨拶をしました。

「爺さん、元気でな。又見に来るからな」

「爺さん、世話になったねえ。ありがとうな」

「爺サン、アリガトウ。又来ルネ」

爺さんは涙で言葉が出ずフクの手を取っておいおい泣くばかりでした。

「おい、そんなに泣いてちゃ、帰りづらいだろうが。又会えるさ。な？」と井上様が言うと、漸く顔を上げた爺さんは「うんうん」と頷いていました。

外には、町の人も見送りに来てくれていました。三人はいつまでも手を振ってくれている人たちに何度も振り向きながら、帰り道に着きました。歩きながら井上様が

「しかし、やっぱり体、昨日より痛いもんだなあ。足がなあ……」と歩みを止めて、足をさすりだしたので

フクは、むふふと笑うと、ひょいと井上様をかたぐるましました。

「おいおい、何するんだ！ フク！ 降ろせ！ 危ない。」と言いましたが

「井上様、足痛イ、家マデコウスルノ」と言って降ろしませんでした。

「しかし、お前！ 揺らすな、落ちるってのに……」と叫びましたが、まんざらでもない様子で「こんな風景なんだ、フクからすると……」と感心していました。

フクはうれしそうにフンフン言いながら歩きました。

じきに井上様の家に着くと、中から母親と奥さんのしづさんが飛び出して来て

「一体どうしたっていうんです？ 山の向こうでもものすごい音がしたからもしや……と思って心配していたのですよ」と、井上様がフクにかたぐるまされている姿を見て言いました。

「はい、鉄砲水の土砂に巻き込まれまして、私がそれをフクが助けてくれて……」

「どうせ、あなたが余計な事をしたからでしょう？ フクさんに迷惑かけたのではないのですか？」

「はい、そうです……」

「全くもう！ 早く中に入って、二人共、怪我はしていないのかい？」

「はい、大丈夫です。」

「でも、フクさんの眼真っ赤じゃないですか。」

「はい、それで、うちにある薬をつけてやろうと、連れて来たんです」

「連れて来たって……あなたがかたぐるまってのはどうなの？」

「それは、あの……足が痛かったんでフクが……」というやり取りを聞いていた伊助が

「いいんですよ。フクも井上様をかたぐるま出来て喜んでるし。気にしないで下さい」

「ソウデス。ウレシイデス」

「ごめんなさいね。フクさん」と奥様が言いました。

家の中に入って、井上様はお母様に又叱られました。伊助の方に行った間に、井上様の側に行つて「……本当に心配しました」と小さな声で言いました。井上様は「うん。済まん……」と応えました。その様子をうれしそうに見ていたお母様は「あらあらフクさん、早く、誰か薬箱を持って来て……」と言って薬箱から、目薬を取り出してつけてやりました。

「沁みる？」

「ダイジョウブ」

「フクさん、直助を助けてくれて本当にありがとう」と礼を言いました。フクは「井上様、大事デス。ヨカッタ」と笑いました。

井上様のお母様はフクの大きな坊主頭をまるで小さな子をなでるようにしました。

「怪我なくてよかったね」

と言うと、フクは

「……少シダケ、寄り掛カカッテモ良イデスカ？」と甘えるように見上げて聞きました。

お母様は「どうぞ」と言ってその大きな頭を抱きしめてやりました。

その時、（この子、別れる時が近づいている……。私のことを忘れないようにしているのだ……）と思いました。そう思うと、涙が出て来ました。そして、フクにしか聞こえないような小さな声で

「フクさん。いつでもここに帰ってらっしゃいね。待っていますよ。団子を作って……」と言いました。フクも言っている事がわかったのか

「……ハイ、ワカリマシタ。又、来マス。兄チャント、イロイロ良クシテクレテ、アリガトウゴザイマシタ」と涙をこらえて言いました。

「いえいえ、こちらこそ」と言ってお母様は、又その頭を抱きしめてやりました。

そこに井上様に来て「何を話してるんです？ 良い事ですか？」と聞いたので

「そうですよ。今度会った時に、何か欲しいものがないかとの話していたのです」と言いました。

伊助はそれを聞いて、ある覚悟を決めました。その晩は二人は井上様の家に泊めてもらいました。

次の朝フクはもう一度眼の薬をつけてもらい、又たくさんのお土産を貰っていました。

お母様は二人が玄関を出る時、そつとフクの手を取つて

「約束ですよ。きっと、又いらっしゃいね」と声を掛けました。

フクは目に涙を浮かべて

「ハイ」とだけ言いました。

「あらあら泣いたら、又眼が赤くなるじゃないの」と言いましたが、お母様の眼も涙で赤くなっていました。

二人はいつまでも手を振る三人と別れを惜しみ歩きました。伊助はもう迷うことなく決めていたので少し歩いて、フクに言いました。

「フク、お前何か俺に言いたい事ないか？ そろそろお前、お前の星に帰らないとなんないんじゃ

ないのか？」と聞きました。フクは歩くのを止めて、黙ってコクンと頷きました。

「やっぱりそうか……。わかってたんだぞ」

「ウン……。フク言エナカッタ……。一緒ニイタカッタカラ……」と言って泣き出しました。

その姿を見て、伊助は「あのさ……。お前が行くなら……。俺も一緒に連れてってくれないか？お前の星って所にさ……。いや、連れてってじゃなくて、一緒に行くんだ！ 決めたんだ！ だって兄弟だろ？ そうだろ？ 弟の面倒はしっかり見ないと」と言いましたが、フクが何と言うか不安でした。でも、フクが「兄チャン！ ホント！ 一緒ニ来テクレルノ？ 一緒ニ？」と伊助の手を取りました。

「ああ、本当さ。いいか？ いいな！ いいんだな？」と、念を押しました。

伊助は、今生きている所よりも、フクと生きていく事を選びました。今まで生きてきたことの未練を断ち切っても後悔しないほど、フクとの絆は強いものになっていました。

「イイ！ 絶対ニイイ！ ウレシイ！」と笑い泣きしながら伊助の周りをくるくる廻りました。

「おいおい、そんなに廻ったら目が廻るぞ。」と伊助も笑いました。

フクはうれしそうに、ひよいと伊助を自分の肩に乗せゆっさゆっさ歩きました。そして、

「兄チャン」

「フク」

「兄チャーン」

「フクよ」と言う声がいつまでも聞こえていました。

それから後、二人の姿を見た人は誰もいませんでした。

何日かして、井上様の家に向山の爺さんが息子達を連れてやって来ました。

「おお、爺さん。どうした？ 息子か？」

「はい、息子でございます。ワシの所へ家族で戻って来てくれました」

「おお、そうか。それはよかった」と言い息子も頭を下げていた時伊助達がいなくなったという事を知らせに来た町の人が玄関に来ました。その話しを聞いた奥様は泣きながら井上様に報告しました、爺さんは呆然とし、立ち尽くしましたが、やがて

「二人で行きなされたのか……。ああそれは良かった」と言いました。お母様も涙をこらえながら

「二人で行きましたよ。二人で……」と言って着物の袖で涙を拭きました。

井上様は何か書いていましたが、それをぎゅっと握りました。その上には涙があとからあとから流れ落ちました。それは墨で書かれた物で、半紙に『井上伊助、井上フク』と書かれた物でした。文字は涙で滲んでいました。そして、「行ったか……。やっぱり……」と言うと声を上げて泣きました。しばらくは誰一人話をするものはいませんでした。漸く井上様が

「皆、もう泣くな。皆心で思っていた通りになったようだな。いつかは別れが来ると……。誰も口にはせなんだが……。だがな、二人で行ったんだぞ、二人で……。こんなうれしい事はあるまいて……。ほんとうの兄弟以上のつながりだったなあ……。血のつながりを越えて、家族になったんだなあ、なれたんだなあ。幸せになってくれれば良いが……。本当に頭の下がる者達だ……」と言いました。お母様も

「そうですね。いつでも帰って来ても良いように……。その時のために、たくさん着物を仕立

てて、おかなくちゃね。しづさん。さあさ、泣いてばかりいるとフクさんに笑われますよ。皆……」と声を掛け、頷く奥様と目を合わせました。

「なあに、井上様、伊助さんが付いてるんだ、フクさんも大丈夫ですよ。又会えますよ。すぐに……その日が来るまで皆で元気ががんばりましょうや……」と、爺さんは自分に言い聞かせるように言いました。

「そうだ爺さんの言うとおりで。生きていれば会えるさな。その時までがんばろうな」と井上様も言いました。

皆は、涙をこらえ必死で笑い顔に変えて、空高くを見上げました。

井上様は、漸く涙も落ちついて、庭に出て見ました。そして、

(伊助、フク、聞こえるか？お前達なら聞こえるよな。お前達と家族になれなかったな……もしかしたら……そんな時も来るかも……とは思っていたんだが……思わないようにしていたんだが……とうとう、やっぱり来たか……残念だ。でもな。いいか？ 聞いているか？ わしはお前達の一番の友達だぞ。一番仲の良い友達だぞ。いいな！ 忘れるな！ だから、友達が困ったり、寂しがったりしたら、来るんだぞ。うれしい時だって会いに来てもいいんだからな……。何もなくてもだ……必ずだぞ！)と、

空を見上げるとそこには、良く晴れた空が広がっていて、大きな虹のようで今まで見たことも無いような色をした雲がありました。

(あの中に、伊助とフクは行ったのだろうか？ あの『かたぐるま』をして行ったのだろうか……頼むぞ又会いに来てくれ……これでお別れは絶対に嫌だからな……それまで皆でお前達の思い出と共に暮しているからな……待っているぞ……伊助！フク！わしは何時までもお前達の一番の友達だぞ……)と思いました。

井上様、聞こえていますよ。別れを言わなかったのは、必ず又、会えるからです。

だから、その時まで待っていて下さい。何か困った事や悲しい事があったら、俺達のことを思ってください。(伊助、どうしたらいい？ フク、フクならどうする？)って思ってください。俺達はどこにいても、いつでも見えています。

必ず来ます。必ず……。

俺の話し、どうでしたか？ 俺？ 俺は今フクと一緒にいます。どこかって？ それは……

「兄ちゃん、団子、出来タヨー」

「おお、そうか、今行く、じゃあこれで……。又、会う日まで……」